



TITLE:

『陰陽十一脈灸經』の研究

AUTHOR(S):

赤堀, 昭

CITATION:

赤堀, 昭. 『陰陽十一脈灸經』の研究. 東方學報 1981, 53: 299-339

ISSUE DATE:

1981-03-14

URL:

<https://doi.org/10.14989/66602>

RIGHT:

『陰陽十一脈灸經』の研究

赤 堀 昭

一、『陰陽十一脈灸經』

『陰陽十一脈灸經』は馬王堆三號漢墓中から發見された帛書の一つである。これらの帛書にはいずれも標題がつけられてなく、この名稱も中國の研究者たちによってつけられたものである。經脈の數はこれまでに知られていた後世の書では、いずれも陰陽各六の十二となっているが、この墓から出土したものでは手の厥陰脈を缺いていて、陽脈六、陰脈五の計十一となっている。この墓の經脈書は二種類あり、その記載内容に違いがあるほかに、經脈の配列についても違いがある。すなわち一方が陽脈六についての記載を並べたのちに陰脈五について記載しているのに對し、他方は足脈六について述べたのちに、臂脈五に觸れている。『陰陽十一脈灸經』（以下『陰陽灸經』と略）と『足臂十一脈灸經』（『足臂灸經』）という名稱は、この配列様式に注目して着けられたものである¹。

『陰陽灸經』には二種類のテキストが知られている。そのうち甲本と名づけられたものは幅二四糲の帛の上に『足臂灸經』に續いて書かれたもので、そのあとに『脈法』と『陰陽脈死候』、『五十二病方』が續いている¹²。乙本は幅五三糲の帛の上に『却穀食氣篇』に續いて、行も改めずに書かれ、そのうしろには『導引圖』が描かれている¹³。この二種の書は細部に違いはあるものの、ほとんど一致し、同一の書と考えてよい。ただし、兩書に用いられている文字にはかなり一致しな

いものがあるから、兩書が寫された年代には違いがある、という可能性もある。帛書は折疊まれていたために、前後の部分が癒着してかなりひどい損傷を受け、隨所に缺損部分があるが、さいわいなことに、それらの部分の多くは兩書で違っているために、兩者を比較することによって、かなりの部分を埋めることができる。

『陰陽灸經』は後述のように、現在する中國醫學古典との對比において重要な意義を持っているために、その考釋を試みるとともに、若干の考察をも加えることにした。

二、『陰陽十一脈灸經』考釋

『陰陽灸經』は寫眞が公表されていない。釋文は最初、甲乙兩本とも『文物』誌上に發表されたが、甲本は最近『五十病方』(以下『病方』)という單行書のなかにも收められて刊行された。そこでは前回の發表が一部改められているため、今回はその釋文を底本とし、缺けた部分を乙本から補った。ただし簡體字は舊漢字に改めた。この灸經に收められた各脈の記載は一定の様式に従っていて、三部分から構成されている。すなわち冒頭の脈の走向を記述した部分と、是動則病と其所産病という文字によって導かれる部分である。甲本は各脈毎に行を改めて書かれている。しかし脈毎ではかなり長くなるものもあるため、以下の考釋に際しては、便宜上前記の三部分ずつに分けて扱うことにした。したがって是動則病と其所産病は下記の釋文では新しい行の冒頭に來ているが、原文ではその前の區切りの最後の文字の下に續けて書かれている。また釋文では、原本で行が變るたびに行を改めた。その上の數字は原本での行數を示すものである。それが1から始まっていないのは、前述のように、その前に『足臂灸經』が書かれていて、それが一行から三十四行までを占めているからである。

現存する『黄帝内經太素』(以下『太素』)、『黄帝内經素問』(『素問』)、『黄帝内經靈樞』(『靈樞』)、『黄帝甲乙經』(『甲乙經』)、『脈經』には、相互に共通する部分がある。そのうちの一つの十二經脈に關する部分は、のちに述べるように、『陰陽灸經』またはその祖本に由來すると考えられるため、『陰陽灸經』の釋文と並べて、『太素』の對應する部分を示すことにした。

35 〔鉅陽脈。〕^① 潼外踝裏中。^② 出却中。^③ 上穿跟。^④ 出獸中。^⑤ 夾脊。^⑥ 出於項。^⑦ □頭角。^⑧ 下顏。^⑨ 夾

36 闕。穀目内廉。^⑩

『太素』膀胱足太陽之脈。起於目内眦。上額。交顙上。^⑪ 其支者。從顙至耳上角。^⑫ 其直者。從顙入絡腦。還出別下項。^⑬ 脩肩膊内。俠脊抵腰中。入脩膂。絡腎。屬膀胱。其支者。從腰中下貫膂。入臛中。其支者。從膊内左右別下貫脾。^⑭ 過髀樞。脩髀外後廉。下合臛中。以下貫臑。出外踝之後。脩京骨。至小指外側。

足の太陽の脈は外側のくるぶしの(後の)くぼみをつきあがり、脚に出、上行して臀部をつらぬき、大腿骨頭のうしろに出、脊柱をはさんで〔上行して〕、項に出、ひたいの髪の毛の生え際〔で交叉し〕、ひたいの中央部を下り、眉間の骨の兩側を通して、目がしらにつらなる。

是僅則病。^⑮ 潼頭痛。^⑯ □□□脊痛。^⑰ 要以折。^⑱ 脾不可以運。^⑲ 臑

37 如結。臑如〔裂。此〕爲蹠蹶。是鉅陽脈〔主治〕。

『太素』是動則病。衝頭痛。目似脫。項似拔。脊痛。腰似折。脾不可以廻。臛如結。臑如裂。是爲蹠蹶。是主筋。これが亂れると病氣になる。それは頭がずきずき痛み、□□□、背中が痛み、腰が折れそうに〔感じ〕、大腿をま

其所產病。⁽⁵⁸⁾頭痛。耳聾。⁽⁵⁹⁾項痛。耳⁽⁶⁰⁾

38 疆。瘡⁶¹。北⁶²痛。要⁶³痛。尻⁶⁴痛。脗⁶⁵痛。臑⁶⁶痛。〔足小指痺。爲十〕二病。

それがひき起すところの病氣は頭痛、高度の難聴、項痛、耳彊、マラリア、背痛、腰痛、尻痛、痔、脚痛、ふくらはぎの痛み、足の小指「のしびれ」の十二病である。

39
〔少〕^①陽眠。^③數于外踝之前廉。^⑤上出魚股之〔外〕。^⑦出□上。^⑨〔出目前〕。^⑪

『太素』膽足少陽之脈。起於目兌眥⁽⁷⁶⁾。上抵角⁽⁷⁸⁾。下耳後。脩頸⁽⁷⁷⁾。行手少陽之前⁽⁷⁹⁾。至肩⁽⁸⁰⁾上。却交出手少陽之後。入缺盆⁽⁸¹⁾。其支者。從耳後入耳中。出走耳前。至目兌眥後⁽⁸²⁾。其支者。別目兌眥下大迎⁽⁸³⁾。合手少陽於頤下⁽⁸⁴⁾。加頰車⁽⁸⁵⁾。下頸。合缺盆⁽⁸⁶⁾。以下胸中。貫鬲⁽⁸⁷⁾。絡肝⁽⁸⁸⁾。屬膽⁽⁸⁹⁾。脩脇裏⁽⁹⁰⁾。出氣街⁽⁹¹⁾。繞毛際⁽⁹²⁾。橫入髀癰中⁽⁹³⁾。其直者。從缺盆下掖⁽⁹⁴⁾。脩胸⁽⁹⁵⁾。過季脇⁽⁹⁶⁾。下合髀癰中⁽⁹⁷⁾。以下脩髀太陽⁽⁹⁸⁾。出膝外廉⁽⁹⁹⁾。下外輔骨之前⁽¹⁰⁰⁾。直下抵絕骨之端⁽¹⁰¹⁾。下出外踝之前⁽¹⁰²⁾。脩足跗上⁽¹⁰³⁾。入小指次指之間⁽¹⁰⁴⁾。其支者。別跗上⁽¹⁰⁵⁾。入大指之間⁽¹⁰⁶⁾。脩大指歧內⁽¹⁰⁷⁾。出其端⁽¹⁰⁸⁾。還貫爪甲⁽¹⁰⁹⁾。出三毛⁽¹¹⁰⁾。

少陽の脈は外側のくるぶしの前の縁につながり、上行して大腿下部の外に出、□の上に出て目の前に出る。

是僮則病。⁽⁹⁷⁾〔心與脇痛

40 不〕可以反稷。⁽⁹⁸⁾甚則無膏。足〔外〕⁽⁹⁹⁾反。是爲陽〔蹶〕⁽¹⁰⁰⁾。是少陽〔脈主〕⁽¹⁰¹⁾治。

『太素』是動則病。口苦。善太息。心脇痛。不能反側。⁽¹⁰²⁾甚則面塵。⁽¹⁰³⁾體無膏澤。足少陽反熱。⁽¹⁰⁴⁾是爲陽厥。是主骨。これが亂れると病氣になる。胸と脇が痛み、ねがえりをうつことができない。ひどい場合には〔やせて〕あぶらけがなくなり、足が外側を向いてしまう。これを陽厥という。これは少陽の脈がつかさどっているところである。

其所產病。⁽¹⁰⁶⁾□□□〔頭〕⁽¹⁰⁷⁾。

41 頸〕痛。脇痛。⁽¹⁰⁸⁾瘧。⁽¹⁰⁹⁾汗出。節盡痛。⁽¹¹⁰⁾脾〔外〕⁽¹¹¹⁾廉〔痛〕⁽¹¹²⁾。〔□〕痛。⁽¹¹³⁾魚股痛。⁽¹¹⁴⁾〔膝外廉〕痛。⁽¹¹⁵⁾振寒。⁽¹¹⁶⁾〔足中指〕⁽¹¹⁷⁾。爲十二病。

『太素』所生病者。頭角顛痛。⁽¹¹⁸⁾目兌皆痛。⁽¹¹⁹⁾缺盆中腫痛。⁽¹²⁰⁾掖下腫。⁽¹²¹⁾馬刀俠嬰。汗出。振寒。瘧。胸脇肋髀膝外至脛絕骨外踝前。及諸節皆痛。小指次指不用。爲此諸病。⁽¹²²⁾盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則人迎大一倍於寸口。虛者則人迎反小於寸口。⁽¹²³⁾

それがひき起すところの病氣は□□□、頭と頸の痛み、脇の痛み、マラリア、發汗、すべての關節の痛み、大腿骨頭部の外側の痛み、□痛、大腿下部の痛み、膝の外側の痛み、さむけを伴ったふるえ、足の中指のしびれの十二病である。

43 陽明脈。⁽¹²⁴⁾〔穀〕⁽¹²⁵⁾于髀骨外廉。⁽¹²⁶⁾循髀而上。⁽¹²⁷⁾穿臆。⁽¹²⁸⁾出魚股□□□□。⁽¹²⁹⁾穿〔乳〕⁽¹³⁰⁾。穿頰。⁽¹³¹⁾〔出目外〕⁽¹³²⁾。
44 廉。環〔顏〕⁽¹³⁴⁾□。

『太素』胃足陽明之脈。起於鼻⁽¹³⁶⁾。交頰中⁽¹³⁷⁾。下脣鼻外⁽¹³⁸⁾。入上齒中。還出俠口。環脣。下交承漿。却脣頤後下廉。出大迎⁽¹³⁹⁾。脣頰車⁽¹⁴⁰⁾。上耳前。過客主人⁽¹⁴¹⁾。脣髮際⁽¹⁴²⁾。至額顙⁽¹⁴³⁾。其支者。從大迎前下人迎⁽¹⁴⁴⁾。脣喉嚨⁽¹⁴⁵⁾。入缺盆⁽¹⁴⁶⁾。下膈⁽¹⁴⁷⁾。屬胃⁽¹⁴⁸⁾。絡脾⁽¹⁴⁹⁾。其直者。從缺盆下乳內廉⁽¹⁵⁰⁾。下俠脊⁽¹⁵¹⁾。入氣街中⁽¹⁵²⁾。其支者。起胃口⁽¹⁵³⁾。下脣腹裏⁽¹⁵⁴⁾。下至氣街中⁽¹⁵⁵⁾。而合⁽¹⁵⁶⁾。以下髀⁽¹⁵⁷⁾。抵伏菟⁽¹⁵⁸⁾。下膝⁽¹⁵⁹⁾。入臏中⁽¹⁶⁰⁾。下脣脰外廉⁽¹⁶¹⁾。下足跗⁽¹⁶²⁾。入中指內間⁽¹⁶³⁾。其支者。下膝三寸⁽¹⁶⁴⁾。而別以下入中指外間⁽¹⁶⁵⁾。其支者。別跗上⁽¹⁶⁶⁾。入大指間⁽¹⁶⁷⁾。出其端⁽¹⁶⁸⁾。

陽明の脈は脛の骨の外側「の下部」につながり、脛の骨をめぐって上行し、膝蓋をつらぬいて、大腿の下部に出、□□□、乳をつらぬき、頰をつらぬき、まなじりの外縁に出、ひたいの中央部をめぐって、□。

是僅則病⁽¹⁵⁰⁾。洒洒病寒⁽¹⁵¹⁾。喜龍⁽¹⁵²⁾。婁吹⁽¹⁵³⁾。顏⁽¹⁵⁴⁾。病腫⁽¹⁵⁵⁾。病至則惡人與火⁽¹⁵⁶⁾。聞⁽¹⁵⁷⁾。
45 木音則慄然驚⁽¹⁵⁸⁾。心腸⁽¹⁵⁹⁾。欲獨閉戶牖而處⁽¹⁶⁰⁾。病甚⁽¹⁶¹⁾。則欲⁽¹⁶²⁾。登高而歌⁽¹⁶³⁾。棄⁽¹⁶⁴⁾衣⁽¹⁶⁵⁾而走⁽¹⁶⁶⁾。此爲⁽¹⁶⁷⁾。
46 肝厥⁽¹⁶⁸⁾。是陽明脈主治⁽¹⁶⁹⁾。

『太素』是動則病。洒洒振寒⁽¹⁷⁰⁾。善伸⁽¹⁷¹⁾。數欠⁽¹⁷²⁾。顏黑⁽¹⁷³⁾。病至則惡人與火⁽¹⁷⁴⁾。聞木音則惕然而驚⁽¹⁷⁵⁾。心欲動⁽¹⁷⁶⁾。獨閉戶牖而處⁽¹⁷⁷⁾。甚則欲上高而歌⁽¹⁷⁸⁾。棄衣而走⁽¹⁷⁹⁾。賁腹腹⁽¹⁸⁰⁾。是爲肝厥⁽¹⁸¹⁾。是主血⁽¹⁸²⁾。

これが亂れると病氣になる。ぞくぞくとさむけがし、よくのびをし、しばしばあくびをする。ひたいの中央部が黒くなり、はれものを病む。病氣が起ってくる人と火をきらい、木音を聞くとはっと驚き、むねがどきどきして、獨りで戸や窓をしめてとじこもろうとする。病氣がひどくなると「高いところのぼって」歌ったり、着物を脱ぎすてて走ったりしたがる。これを肝厥という。これは陽明の脈がつかさどっているところである。

三〇五

これが亂れると病氣になる。⁽²¹³⁾「のどの痛み」、あごがはれて、ふりむくことができない。肩は抜けそうで、上腕は折れそう「な感じがする」。これは肩脈がつかさどっているところである。

〔其所産病〕。⁽²¹⁴⁾頷⁽¹⁷⁹⁾〔痛。喉痺。臂痛。肘〕⁽²¹⁵⁾痛。⁽²¹⁶⁾爲四病。⁽²¹⁷⁾

『太素』所生病者。耳聾。目黃。頰腫。頸頷肩臑肘臂外後廉痛。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則人迎大再倍於寸口。虛者則人迎反小於寸口。⁽²¹⁸⁾それがひき起すところの病氣はあごの痛み、⁽²¹⁹⁾のどの麻痺、⁽²²⁰⁾前腕の痛み、⁽²²¹⁾ひじの痛みの四病である。

耳脈。起于手北。⁽²²²⁾出臂外兩骨之間。⁽²²³⁾〔上骨〕下廉。⁽²²⁴⁾〔出肘中〕。入耳中。⁽²²⁵⁾

『太素』三焦手少陽之脈。起於小指次指之端。上出兩指之間。脩手表。⁽²²⁶⁾出臂外兩骨之間。上貫肘。脩臑外。上肩。⁽²²⁷⁾而交出足少陽之後。入缺盆。布臑中。散脇心包。下臑。徧屬三焦。⁽²²⁸⁾其支者。從臑中上出缺盆。上項。係耳後。直上。⁽²²⁹⁾出耳上角。以屈下頰。⁽²³⁰⁾至頤。其支者。從耳後入耳中。出走耳前。過客主人前。交頰。至目兌眥。⁽²³¹⁾

耳脈は手の甲に起り、前腕の背側で二本の骨のあいだに出、橈骨の小指側の縁にそって「上り」、ひじに出、耳のなかにはいる。

是僮則病。耳聾。⁽²³²⁾

51 焔焔⁽²³³⁾。噤⁽¹⁸¹⁾。是耳脈主治。⁽²³⁴⁾

『太素』是動則病。耳聾。渾渾淳淳。噤。喉痺。是主氣。⁽²³⁵⁾

これが亂れると病氣になる。高度の難聴が起り、音が耳にこもって重苦しく、のどがはれる。これは耳脈がつかさどっているところである。

其所産病。目外漬痛。⁽²³⁸⁾ 頰⁽¹⁷⁷⁾。耳聾⁽²³⁹⁾。爲三病。

『太素』所生病者。汗出。目兌⁽²⁰⁵⁾皆痛。頰痛⁽²⁴⁰⁾。耳後肩臑肘臂外皆痛。小指次指不用。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則人迎大一倍於寸口。虛者則人迎反小於寸口。それがひき起すところの病氣はまなじりの痛み、頰の痛み、高度の難聴の三病である。

52 齒脈⁽¹³⁾。起于次指與大指上。出臂上廉。入肘中。乘臑⁽²⁴²⁾。〔穿〕頰⁽²⁴³⁾。入齒中。夾鼻⁽²⁴⁾。

『太素』大腸手陽明之脈。起於大指次指之端⁽²⁴⁴⁾。脩指上廉⁽²⁴⁵⁾。出合谷兩骨之間⁽²⁴⁶⁾。上入兩筋之中⁽²⁴⁷⁾。脩臂上廉⁽²⁴⁸⁾。入肘外廉⁽²⁴⁹⁾。上臑外前廉⁽²⁵⁰⁾。上肩⁽²⁵¹⁾。出髃前廉⁽²⁵²⁾。上出於柱骨之會上⁽²⁵³⁾。下入缺盆⁽²⁵⁴⁾。脇肺⁽²⁵⁵⁾。下膈⁽²⁵⁶⁾。屬大腸⁽²⁵⁷⁾。其支者。從缺盆⁽²⁵⁸⁾。上頸⁽²⁵⁹⁾。貫頰⁽²⁶⁰⁾。入下齒中⁽²⁶¹⁾。還出俠口⁽²⁶²⁾。交人中⁽²⁶³⁾。左之右⁽²⁶⁴⁾。右之左⁽²⁶⁵⁾。上俠鼻孔⁽²⁶⁶⁾。

齒脈は「手の」示指と母指「のあいだ」に起り、前腕の母指側の縁に出、ひじにはいり、上腕をのぼり、頰をつらぬき、齒のなかにはいり、鼻を兩側からはさむ。

是〔動〕⁽²⁵⁵⁾

53 則病。齒痛⁽¹⁷⁾。腫種⁽²⁵⁶⁾。是齒脈主治⁽¹³⁾。

『太素』是動則病。齒痛⁽²⁵⁷⁾。頰腫⁽²⁵⁸⁾。是主津⁽²⁵⁹⁾。

これが亂れると病氣になる。齒が痛み、目の下がはれる。これは齒脈がつかさどっているところである。

其所産病。齒痛。⁽¹⁷⁷⁾ 腫痛。⁽²⁵⁶⁾ 目黃。⁽¹⁸¹⁾ 口乾。臍痛。⁽¹⁷⁷⁾ 爲五〔病〕。⁽²⁵⁹⁾

『太素』所生病者。目黃。口乾。𦵿𦵿。喉痺。肩前臍痛。⁽²⁶⁰⁾ 大指次指痛不用。氣盛有餘。⁽²⁶¹⁾ 則當脈所過者熱腫。虛則寒慄不復。⁽⁶⁹⁾ 爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則人迎大三倍於寸口。虛者則人迎反小於寸口。⁽⁷⁰⁾

それがひき起すところの病氣は齒の痛み、目の下のはれ、目の黄染、口中の乾き、上腕の痛みの五病である。

54 大陰脈。⁽²⁶²⁾ 是胃脈。⁽²⁶³⁾ 彼胃。出魚股陰下廉。臍上廉。出〔内〕⁽²⁶⁶⁾ 蹠之上廉。⁽²⁶⁵⁾

『太素』脾足太陰之脈。起於大指之端。脗指内側白肉際。過覈骨後。上内蹠前廉。上臍内。⁽³²⁾ 脗脗骨後。交出厥陰之前。⁽²⁷⁰⁾ 上脗膝股内前廉。入股。屬脾。絡胃。⁽²⁷¹⁾ 上臍。⁽¹⁴⁰⁾ 俠咽。連舌本。散舌下。其支者。腹從胃別上臍。⁽¹⁴⁰⁾ 注心中。⁽²⁷²⁾

「足の」太陰の脈、これは胃脈である。胃を覆い、大腿下部のうしろがわの下端に出、ふくらはぎの上端〔を〕通つて、内側のくるぶしの上縁に出る。

是動則病。上□⁽²⁷³⁾

55 走心。使復張。善噫。⁽²⁷⁴⁾ 食欲歐。⁽²⁷⁵⁾ 得後與氣則快然衰。⁽²⁷⁶⁾ 是鉅陰脈主治。⁽²⁷⁹⁾

『太素』是動則病。舌強。食則歐。⁽²⁸¹⁾ 胃脘痛。腹脹。善噫。得後出餘氣。⁽²⁸²⁾ 則快然如衰。⁽²⁸³⁾ 身體皆重。是主脾。⁽²⁸⁵⁾

これが亂れると病氣になる。上□して心に達し、腹を脹らせる。よくおくびを出し、食べると嘔きそうになる。〔し

かし、その病状は」大便と腸内のガスが出ると、すうっと衰える。これは太陰の脈がつかさどっているところである。

其所〔産病〕⁽²⁸⁶⁾。

56 □□。心煩。死。心痛與復張⁽¹⁷⁷⁾。死。不能食。不能卧⁽²⁷⁴⁾。強吹⁽²⁷⁵⁾。三者同則死。唐泄。死。〔水與〕⁽²⁸⁷⁾。

57 閉同則死。爲十病。

『太素』所生病者。舌本痛。體不能動搖。食不下。煩心。心下急痛。漉瘕洩。水閉。黃痺不能卧⁽²⁹⁴⁾。強欠⁽²⁹⁵⁾。股膝内腫⁽²⁹⁶⁾。大指不用。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則寸口大三倍於人迎。虛者則寸口反小於人迎⁽³⁰⁰⁾。

それがひき起すところの病氣は□□、胸苦しさ。それがあゝる時は死ぬ。むねの痛みと腹部の膨満。それがあゝる時は死ぬ。食ふことができないこと、横になることができないこと、あくびが出そうでないこと。この三者が同時に起るときは死ぬ。粘液を混じた泥状の下痢、それがあゝると死ぬ。水腫と尿閉。それが同時に起るときは死ぬ。この十病である。

58 厥陰脈。穀于足大指敦⁽³⁰³⁾〔毛〕⁽³⁰⁴⁾之上。乘足〔跗上廉〕。去内踝一寸。上〔踝〕五寸而〔出大陰之後〕⁽³⁰⁵⁾。

59 上出魚股内廉。觸少腹。大瀆旁⁽³¹³⁾。

『太素』肝足厥陰之脈。起於大指葉毛之上。脩足跗上廉。去内踝一寸。上踝八寸。交出太陰之後。上臑内廉。脩陰股。入毛中。環陰器。抵少腹。俠胃。屬肝。絡膽。上貫膈。布脇肋。脩喉嚨之後。上入頰頰。連目系。上出額。與督脈會於顙。其支者。從目系下頰裏。環唇内。其支者。復從肝別貫膈。上注肺⁽³¹⁵⁾。

厥陰の脈は母趾の聚毛の上につながり、足の甲の上をのぼり、内側のくるぶしから一寸のところを通り、くるぶしから五寸上行したところで太陰の脈のうしろに出、上行して大腿下部の内縁に出、下腹部にふれて、目がしらのかたわらに達する。

是僅則〔病〕。丈〔夫〕。山。婦人則少腹腫。要痛。

60 不可以叩。甚則噎乾。面疵。是厥陰脈主治。

『太素』是動則病。腰痛。不可以俛仰。丈夫頰疔。婦人少腹腫腰痛。甚則噎乾。面塵。是主肝。

これが亂れると病氣になる。男子なら陰囊の腫脹が起ってひどく痛み、女子なら下腹部がはれ、腰が痛んで、上を向くことができなくなる。ひどくなるとのどがからからになり、顔面にしみがでる。これは厥陰の脈がつかさどっているところである。

〔其〕所産病。熱中。降。隤。扁山。□□

61 有而心煩。死。勿治。有陽脈與之。俱病。可治。

『太素』所生病者。胸滿。歐逆。飡洩。狐疝。遺溺。閉瘡。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則寸口大一倍於人迎。虛者則寸口反小於人迎。

それがひき起すところの病氣は熱中、尿路障害、陰囊の腫脹、片側の下腹部のひどい痛みと□である。□があつて胸苦しいと死んでしまい。なおることがない。陽脈にこれといっしよに病氣がある時には、なおることができる。

62 少陰脈⁽¹³⁾。澁于内腠外廉。穿膈。出胎〔中〕央。上穿脊之□廉。澁于腎。夾舌。

『太素』腎足少陰之脈。起於小指之下。邪趣足心。出於然骨之下。脩内踝之後。別入跟中。以上膈内。出膈内廉。上股内後廉。貫脊。屬腎。絡膀胱。其直者。從腎上貫肝脘。入肺中。脩喉嚨。俠舌本。其支者。從肺出脇心。注胸中。

少陰の脈は内側のくるぶしの外縁につながり、ふくらはぎをつらぬき、すねの中央に出、上行して脊柱の□縁をつらぬき、腎につながり、舌を兩側から挟む。

〔是動則病〕⁽³⁵⁵⁾

63 恂恂如喘。坐而起則目瞋如毋見。心如縣。病飢。氣〔不足〕。善怒。心惕。恐〔人將捕之〕。

64 不欲食。面黧若黧色。欬則有血。此爲骨蹶。是少〔陰〕脈主〔治〕。

『太素』是動則病。飢不欲食。面黑如地色。欬唾則有血。喝喝如喘。坐而欲起。起目眩眩。如無所見。心如懸。病飢狀。氣不足則善恐。心惕惕如人將捕之。是爲骨厥。是主腎。

これが亂れると病氣になる。はあはあと息切れがしているようで、坐っていて立ち上ると目の前がぼうつとして見えない。心臓が不安定で、飢えたようにやせ、氣が不足し、怒りやすくなる。むねがどきどきして、他人が自分を捕えようとしているのではないかと心配になる。食欲がなく、顔色が黒く、燃え残りのような色になり、せきをするところである。

其〔所産病〕⁽³⁷⁸⁾。□□□□□□

65 舌⁽³⁷⁹⁾析。噎⁽³⁸⁰⁾乾。上氣。饑⁽³⁸¹⁾。噎中痛⁽³⁸²⁾。痺⁽³⁸³⁾。耆臥⁽³⁸⁴⁾。欬⁽³⁸⁵⁾。音。爲十病。⁽³⁸⁶⁾〔少〕陰之脈。⁽³⁸⁷⁾〔久則強食產肉。緩帶〕。⁽³⁸⁸⁾
66 皮髮。大丈。重履而步。久幾息則病已矣。⁽³⁸⁹⁾

『太素』所生病者。口熱。舌乾。咽腫。上氣。噎乾及痛。煩心。心痛。黃痺。腸澼。脊股內後廉痛。委厥。嗜臥。⁽³⁹⁰⁾
足下熱而痛。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。灸則強食⁽³⁹¹⁾生肉。緩帶。被髮。大杖。重履而步。盛者則寸口大再倍於人迎。虛者則寸口反小於人迎。⁽³⁹²⁾

それがひき起すところの病氣は□□□□□□、舌が裂ける、のどがからからに乾く、上氣、のどのつかえ、のどの痛み、からだの衰弱、すぐに横になりたがる。せき、發聲不能の十病である。少陰の脈〔の病氣〕は、灸をすえる時には強制的に生肉を食せさせ、「帶をゆるめ」、ざんばら髪にし、大きな杖をつかせ、はきものを重くして歩かせる。灸をすえて、いくらもたたないうちに病氣はなおる。

67 臂鉅陰脈⁽⁴⁰³⁾。在于手掌中⁽⁴⁰⁴⁾。出內陰兩骨之間⁽⁴⁰⁵⁾。上骨下廉。筋之上。出臂〔內陰。入心中〕。

『甲乙經』肺手太陰之脈。起於中焦。下絡大腸。還循胃口。上膈。屬肺。從肺系。橫出腋下。下循臑內。行少陰心主之前。下肘中。循臂內上骨下廉。入寸口。上魚。循魚際。出大指之端。其支者。從腕後直出次指內廉。出其端。⁽⁴⁰⁶⁾
手の太陰の脈は手掌のなかにあり、〔前腕の〕前側で二本の骨のあいだ、橈骨の小指側の縁の筋の上に出、前腕の前側に出て、心のなかにはいる。

68 是僮則病⁽⁴¹²⁾。心滂滂如痛⁽⁴¹³⁾。缺盆痛⁽⁴¹⁴⁾。甚〔則〕交兩手而戰⁽⁴¹⁵⁾。此爲臂蹶⁽⁴¹⁶⁾。〔是臂鉅陰脈主〕
69 治。

『甲乙經』是動則病。肺脹滿。膨膨然而喘咳。缺盆中痛。甚則交兩手而脅。是謂臂厥。是主肺。これが亂れると病氣になる。心臟がどきんどきんとうって痛いような感じがし、大鎖骨上窩が痛む。ひどくなると兩手を組んでおののく。これを臂厥という。これは手の太陰の脈がつかさどっているところである。

其所產病。胸痛。癰痛。心痛。四末痛。段。爲五病。

『甲乙經』所生病者。咳。上氣。喘喝。煩心。胸滿。臑臂內前廉痛厥。掌中熱。氣盛有

『太素』餘。則肩背痛。風寒。汗出。中風。不決。數欠。氣虛則肩背痛寒。少氣不足以息。溺色變。爲此諸病。盛則寫之。虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則寸口大三倍於人迎。虛者則寸口反小於人迎。

それがひき起すところの病氣は胸部の痛み、癰痛、心臟部の痛み、四肢の痛み、女性性器中のかたまりの五病である。

70 臂少陰脈。起于臂兩骨之間之下骨上廉。筋之下。出臑內陰。入心中。

『太素』心手少陰之脈。起於心中。出屬心系。下膈。絡小腸。其支者。從心系上俠咽。繫目系。其直者。復從心系却上肺。上出掖下。下脘臑內後廉。行太陰心主之後。下肘內。脘臂內後廉。抵掌後兌骨之端。入掌內廉。脘小指之內。出其端。

手の少陰の脈は前腕の二本の骨のあいだ、尺骨の母指側の縁の筋の下に起り、上腕の内側に出、心のなかにはいる。

〔是動則病。心〕

71痛。⁽¹⁷⁷⁾益渴欲飲。⁽⁴⁴⁵⁾此爲腎厥。⁽⁵⁰⁾是少陰脈主治。⁽¹³⁾

『太素』是動則病。噎乾。心痛。渴而欲飲。爲腎厥。⁽⁴⁴⁷⁾是主心。

これが亂れると病氣になる。心臓部が痛み、のどがからからにわいて水を飲みたくなる。これを腎厥という。これは少陰の脈がつかさどっているところである。

其所產〔病。⁽⁴⁴⁸⁾脇〕痛。⁽¹⁷⁵⁾爲〔一病〕。⁽⁴⁴⁹⁾

『太素』所生病者。目黃。脇痛。臑臂内後廉痛厥。掌中熱痛也。⁽⁴⁵¹⁾爲此諸病。盛則寫之。⁽⁴⁵²⁾虛則補之。熱則疾之。寒則留之。陷下則灸之。不盛不虛。以經取之。盛者則寸口大再倍於人迎。虛者則寸口反小於人迎。⁽⁴⁵⁰⁾それがひき起すところの病氣は脇の痛みの一病である。

三、『陰陽十一脈灸經』の構成

既に述べたように、各脈は次のようなほぼ一定の様式に従って記述されているが、よく検討すると多少の亂れと問題點が認められる。

巨陽脈……是動則病……此爲踝厥是巨陽脈主治其所產病……爲十二病。
少陽脈……是動則病……此爲陽厥是少陽脈主治其所產病……爲十二病。
陽明脈……是動則病……此爲鼯厥是陽明脈主治其所產病……爲十病。
肩脈……是動則病……是肩脈主治其所產病……爲四病。

耳脈……是動則病……是耳脈主治其所產病……爲三病。

齒脈……是動則病……是齒脈主治其所產病……爲五病。

太陰脈……是動則病……是巨陰脈主治其所產病……爲十病。

厥陰脈……是動則病……是厥陰脈主治其所產病……。

少陰脈……是動則病……此爲骨脈是少陰脈主治其所產病……爲十病……。

臂巨陰脈……是動則病……此爲臂脈是臂巨陰脈主治其所產病……爲五病。

臂少陰脈……是動則病……此爲臂脈是臂少陰脈主治其所產病……爲一病。

すなわち脈の名稱には單に巨陽、少脈の脈などと呼ばれている一群と肩、耳、齒脈とされているもの、更に臂の字が上についている巨陰と少陰の二脈の三群がある。最初の一群は後世の足の脈に、あとの二群は手の脈に相當するため、以後これらを總稱して足の脈と手の脈と呼ぶことにする。第二に脈の亂れによって起る病氣は踝脈、陽脈などとされているが、肩、耳、齒、太陰、厥陰の各脈には、これに相當する部分が脱落している。なお手の太陰と少陰の脈の病氣が、ともに臂脈とされているのは、恐らくどちらかが誤りであろう。また踝、肝、臂という身體の一部位の名稱と骨という總稱との違いはそれほど重要ではないとしても、陽は全く異質の概念である。したがって、この帛書の成立までのあいだに、これらが違った立場の人たちによって命名されたか、傳寫の誤りが起った可能性が考えられる。またこれらが無い五脈、特に肩、耳、齒脈の場合には、もとあったものが脱落したとするよりは、これらの名稱が提起される以前の狀態を示していると考えるべきであろう。第三にこの項は脈の亂れによって起る病氣の症狀を列記しているだけであるが、足の太陰脈の項にだけは、得後與氣則忤然衰という、病狀の好轉を示すと考えられる文が挿入されている。第四に各脈がひき起すところの病氣を示す、其所產病以下の項では、その病氣乃至病狀を列記しているが、足の太陰の脈と厥陰の脈では、その豫後について

でも觸れ、特に後者では陽脈に病氣がある時には、という他の脈には見られない記述がある。第五にこの項の終りには、その病氣の數を擧げているが、足の厥陰の脈にだけはそれが缺けている。これは恐らくもとはあったものが脱落したのであろう。この脈のこの部分に記載されている病氣の數は數えにくいが、同じ傾向の足の太陰の脈の例にならって數えるならば、六病ということになる。第六に各脈についての記載は病氣の數で終っているが、足の少陰の脈にだけは、その下に灸治を施した場合に取るべき、注意事項ともいえる處置が書かれている。足の陰脈にだけ見られる、前記の三種の例外的な記事は、もともとあったというよりは何らかの原因によってのちにつけ加えられた可能性が強い。確證はないが、當時の醫學書の傳授様式からみて、師から伝えられたテキストに弟子が師の講義または自らの經驗を注または備忘として書き足したものが、次に書き寫すときに、誤って本文のなかに偏入されてしまったと解すべきではなからうか。

脈の走向とその經路、特に『足臂灸經』および『靈樞』との比較については、既に中國の研究者たちによって詳しく論じられているから、改めて取上げる必要はなく、ここでは『陰陽灸經』内で各脈を比較してみることにする。その起點を示す記述と終點を、比較のために整理して並べると、次のようになっている。

巨陽脈	潼外踝裏中	繫目內廉
少陽脈	繫于外踝之前廉	出目前
陽明脈	繫于胛骨外廉	環顏□
肩脈	起于耳後	乘手背
耳脈	起于手背	入耳中
齒脈	起于次指與大指上	俠鼻
大陰脈	被胃	出內踝之上廉

厥陰脈

繫于足大指聚毛之上

大指旁

少陰脈

繫于內踝外廉

俠舌

臂巨陰脈

在于手掌中

入心中

臂少陰脈

起于臂兩骨之間

入心中

これで見ると足の脈と呼ばれているものはすべて足から起る、あるいは足に終るものであり、手の五脈は手に起るか、あるいはそこに終っている。更に足の陽脈は下腿の外側（腓骨側）から起り、陰脈は逆に脛骨側に起るか終っている。一方、手の脈では、後世の太陽と少陽の脈に相當する肩脈と耳脈は手背に起るか終っていて、太陰の脈は手掌から起っている。ただし陽明の脈の親指と人差指「のあいだ」と少陰の脈の前腕の二本の骨のあいだから起るといふのは、正確にはどちらがわであるかわからないが、前者が手の背側、後者が前腕の内側と推定しても恐らく誤りではなからう。したがって陰陽には脈の經路も無關係ではないかもしれないが、手足陰陽の別は起點あるいは終點の位置によって決定された可能性が強い。このように考えると、この灸經の成立は身體各部位、少なくとも四肢末端部の陰陽配當が確立された時期あるいはそれ以後との推定が成立する。

各脈とも一方の端が足首または手首の附近になっているのは、それが四肢の末端であるから當然としても、他端については足の脈と手の脈で違いがみられる。すなわち足の脈は太陰の脈が胃になっているのを除いて、その他はすべて目と口の周圍になっている。これに對して手の脈では、陽脈は耳と鼻の附近になっているが、太陰と少陰の脈はともに心中に入るとしている。ただし、この二脈はどちらかの記載が誤りという可能性も考えられる。また起點を示す動詞は、足の脈では太陽脈の瀦と太陰脈の被のほかは繫が使われているが、これらの字は手の脈の起點には出現せず、太陰脈の在以外には、手の脈では起だけが使われている。これらの使い分けがどのような意味を持っているかは今後検討すべき問題であらう。

是動則病に導かれる部分と其所産病に續く部分との關係は、『太素』等ではこれに數種の病名乃至症候名が追加されていることもあって難解で、注(58)に二、三の例を示したように、これまでに多くの學者の説が提出されている。中醫研究院の研究者たちも、是動則病に續く部分を、二種（肩脈と齒脈）乃至十種（足の太陽脈と陽明脈）の病氣あるいは病候の名稱を列記したものと解し、踝脈や陽脈などの語もそれらと同格のものと解している。しかし、これはむしろ例えば「少陽の脈が亂れると陽脈と呼ばれる病氣が起つて胸と脇が痛んで、ねがえりをうつことができず、ひどくなるとあぶらがなくなつて、足が外側を向いてしまう」というように、脈の亂れによつて起る病氣が持っているさまざまな症候と、その病氣が進行した時に出て來る病狀を記述したもの、すなわち複數の病氣ではなく、一つの病氣について述べたものと解すべきであらう。ただし、その記載には脈によつて精粗があり、症候の數は一定しないが、足の六脈は五乃至十一で、手の五脈の二乃至五より多く、足と手の脈のあいだに違いが認められる。

次の所産病に續く部分にも病名というよりはむしろ症候名と考えるべきものが含まれているが、これらは是動則病の部分とは違つて、それぞれ獨立した病氣と考えていたと解し、脈の障害によつて二次的に起つて來る病氣を列記したと見做すべきであらう。なお厥陰の脈のこの部分に「陽脈にこれといつしよに病氣がある時には」と書かれている陽脈は、上に臂の字が冠せられていないことから、足の陽脈を意味すると解するのが妥當であらう。是動則病の症候の數と同様に、この項に記載されている病氣乃至症候の數にも足と手の脈で違いがあり、足脈の五乃至十二に對し、手脈は一乃至五で少なくなつてゐる。

このように検討してみると、この灸經は一見よく整理されているものの、足の六脈と手の五脈のあいだには、内容や記載様式に微妙な違いがある。これは脈の呼稱が示しているように、經脈説の發展の段階の、まだ完全に統一されていない状態を示しているのであらう。しかし、その不統一の原因としては、各脈についての集積された經驗の量が一樣でなかつた

たということだけでなく、足の脈と手の脈を唱えたのは別々の學派であつたという推測も成り立ちそうである。その場合には、より知識の豊富な、より進んだ状態に到達していた足の脈の學派が自己の學說のなかに手の脈の學派の說を吸収し、そのために新らしく取り入れた脈の名稱の上に臂の字を冠したと考えられる。このほかに、この灸經には明らかに脱落に起因すると考えられる部分もあり、その意味では必ずしも最善の寫本ではなかつたということを考慮に入れておく必要がある。

四、現存する醫學古典との關係と醫學史上の意義

先に考釋に際して並べて示したように、『陰陽灸經』の文は『太素』を始め、『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』のなかに取入れられている。このことについては既に一部論じたが、ここではもう少し詳しい考察を加えてみたい。

これらの文は、細部に少しの違いがあるけれども、よく一致しているから、同一の起源を有する、あるいはこのうちのあるものを他の書が引用したことは明らかである。それらの文と『陰陽灸經』の一致しない點は次のようである。

一、『陰陽灸經』の臂鉅陰、臂少陰の名稱は手の太陰と少陰に改められ、肩、耳、齒脈に相當するものは、それぞれ手の太陽、少陽、陽明の脈と命名されている。その他の脈にはすべての足が字が冠せられ、鉅陽、鉅陰は太陽、太陰に改められている。

二、各脈には前出の表にまとめたように、それぞれ一種ずつの、陰脈には藏、陽脈には腑が割り當てられている。

三、『陰陽灸經』と『足臂灸經』では脈の數は十一であるが、後世の書では心主手厥陰脈が追加されて十二となっている。⁽⁴⁵⁷⁾

四、各脈の記載には多くの追加がある。これは特に脈の走向路の部分に多く、非常に詳しくなっている。

五、脈の走向は『陰陽灸經』では足の太陰脈と肩脈が遠心性であるほかは、すべて求心性になっているが、後世の書では足の陽脈と手の陰脈が求心性、足の陰脈と手の陽脈が遠心性になっている。

六、『陰陽灸經』の是動則病の項の末尾にある是鉅陽脈主治などの文は是主筋などと改められている。特に陰脈については、それが主るものはそれぞれの胃頭に示した臓になっている。

七、所産病の項の終りにある、病氣の數についての記載は除かれている。

八、各脈によってひき起される病氣を並べたのちに、盛則寫之云々という、治療の根本方針が記載されている。ただし、これは『脈經』では除かれ、『甲乙經』では、どの脈についても共通であるため、最初の手太陰脈以外では省略されている。

九、最後に人迎脈と寸口脈の關係が述べられている。

このような違いはあるが、次のように『陰陽灸經』と後世の書との關係をさらに適確に示す共通点もある。

一、脈の走向路の記載は『陰陽灸經』より著しく詳しくなり、支脈の考えも導入されたりして、その兩端の位置も必ずしも一致しないが、矛盾する點はなく、『陰陽灸經』の説をさらに發展させたものであることが考えられる。⁽⁴⁵⁾

二、是動則病の項に列記された症候名はほとんど完全に『太素』以下の書に引用され、脱落したものは足の陽明脈の腫と足の太陰脈の上□走心の二つだけである。

三、其所産病の項に書かれているものは、前記にくらべると説落が多いが、それでも（足太陽）耳聾、耳聾、（少陽）頸痛、股痛、足中指痺、（陽明）顏痛、頰痛、心與臑痛、腸痛、膝跳、（手太陽）喉痺、（少陽）耳聾、（陽明）齒痛、腫、（足太陰）腹脹、（厥陰）熱中、瘡、（少陰）噎、欬、瘡、（手太陰）癰痛、心痛、四肢痛、瘕だけである。これらのうちで（手少陽）耳聾、（手陽明）齒痛、腫、（足厥陰）瘡は同じ病名乃至症候名が是動則病の項にもあるため、重出を避ける

という意圖で排除されたとも考えられる。

四、『陰陽灸經』の鉅陽脈以下の六脈の是動則病の項の最後に書かれている踝厥などの文字は、そのまま『太素』以下に引用されている。⁽⁴⁵⁸⁾ そのうちの手の鉅陰と少陰の脈の臂厥は先に述べたように、どちらかが誤りではないかと考えられるが、それもそのまま伝えられている。またこれの缺けていた五脈については、『太素』以下の書にも、それに相當する語は挿入されていない。足陽明脈は『太素』と『甲乙經』では肝厥となっているが、『脈經』と『靈樞』では『陰陽灸經』と同じ肝になっている。

五、足の少陰脈の末尾の久則強食產肉以下の文も、そのまま後世の書中に取り入れられている。この種の記事は『陰陽灸經』ではこの脈にだけ認められるが、『太素』以下の書でも同様で、その他の脈には記載されていない。

これらのうち、特に四と五の二點は、『太素』經脈篇その他が、この灸經そのものを發展させたものであることを示す事實である。

この灸經の一部は、このほかに『素問』の藏氣法時論⁽⁴⁵⁹⁾、陽明脈解⁽⁴⁶⁰⁾、厥論⁽⁴⁶¹⁾、脈解⁽⁴⁶²⁾、至眞要大論などの諸篇に引用されている。ただし、これらの各篇での扱いかたは一樣ではない。

藏氣法時論篇は五陰脈だけを取り擧げている。この篇のなかで『陰陽灸經』に直接關係があると思われるものは肝病の項にあるものだけである。ただし肝の脈は『太素』その他の經脈篇では足厥陰脈であるが、ここでは『陰陽灸經』の足少陰脈の一部が「肝病者。兩脇下痛引少腹。令人善怒。虛則目眩眩無所見。耳無所聞。善恐。如人將捕之」の傍線の部分のように少し形を變えて引用されている。これは『陰陽灸經』そのものよりは『太素』經脈篇などに近いが、耳無所聞などはそれらにもなく、經脈篇よりもさらにのちのものと考えられる。その他の心、脾、肺、腎病の項にも、この灸經からの引用を疑わせるものもあるが、これらはそれほど特徴のない文であるため、確言できない。この篇は『甲乙經』その他に

は數力所に分散して取り込まれているから、全體が同一起源のものであるかどうかは疑問であるが、五藏だけでなく、五味、五色も五行に配當されて、それに立脚した理由づけがなされている。

陽明脈解篇は足の陽明脈の是動則病の項の一部の注釋である。この篇の撰者は陰陽論のほかに「鐘鼓不爲動。聞木音而驚何也」、「陽明者胃脈也。胃者土也。故聞木音而驚者。土惡木也」の句が示すように、明らかに五行論にも立脚している。しかも陽明を胃脈であるといっていることから、各脈に藏腑が割當てられてからの著作である。このような注解は他の脈に對してもあつたのではないかと思われるが、現存する書には他の脈についての記述は見當らない。

厥論篇にいうところの厥は、脚氣であるという説もあるが、一般には氣の逆上と解されているものである。この篇の各項には「巨陽之厥。則腫首。頭重。足不能行。發爲胸仆」の腫首頭重と足不能行が『陰陽灸經』足太陽脈の潼頭痛と脾不可以運□□□腦如裂に由來すると想定されるように、灸經の意を受けて書かれたと考えられるものや、『太陰之厥。則腹滿腹脹。後不利。不欲食。食則嘔。不得卧』の腹脹と食則嘔を足太陰脈の是動則病の項から、不欲食と不得卧を所産病の項から引き、それに得後與氣云々または閉の意を受けて作られた後不利の語を加えて組立てたものなどがある。いずれにしても同篇にある盛則寫之虛則補之不盛不虛以經取之の語が示しているように、經脈篇成立以後のものであると考えるべきであろう。

脈解篇は足の六脈の主として是動則病の部分についての解説であるが、所産病の項にあるものも取り挙げられている。既に述べたように、ここで解説の對象としている病氣乃至症狀には『陰陽灸經』にも『太素』の經脈篇にも、また前記の『素問』の各篇にもないものが多數あるから、それらとは別の學派の手になるものと考えることができるであろう。この篇でもう一つ注目すべきことは上走心という經脈篇で脱落していたものが加わっていることである。したがって『陰陽灸經』の各脈の是動則病の項で後世に伝えられなかったものは足の陽明脈の腫だけということになる。この篇については最

近、李鼎氏の詳しい研究があり、この篇に引かれた文は『靈樞』の經脈篇とは異なるもので、『陰陽灸經』とは一致する部分が多いことから、『靈樞』經脈篇成立以前に存在した、『陰陽灸經』とは別の一傳本であろうと論じている。⁽⁴⁶⁶⁾ 別の傳本であったか、『陰陽灸經』を發展させたものであるかについては確證はないが、同氏が指摘している各書での經脈の配列の順序は、これらの學説の成立の時期を検討する際に参考となるものであろう。

至眞要大論はいわゆる運氣七篇のうち的一篇で、王冰が増入したものとされている。⁽⁴⁶⁷⁾ ここにも『陰陽灸經』に由來すると考えられる語句が多數引用されているが、その文は直接、灸經から引かれたとするより、經脈篇からとする方が妥當であろう。ただそれが王冰がしたことであるか、あるいはその頃存在していた書から取り入れたものであるかは不明である。

『陰陽灸經』について、このように多くの解釋が遺されているのは、それを學派の違いによるものと考えるべきであるか、あるいは發展の段階を示していると解すべきか、現状ではまだ決定できないが、漢代に多くの人によって讀まれ、研究された書であることを示している。前述のように、この書には脱落や不統一の點があり、テキストとしては最善のものとはいえないであろう。『太素』經脈篇や前記の『素問』の各篇中に見られる、この灸經にない語句のいくつかは、別に傳えられていたテキストに由來するものかもしれないが、所産病の數などから考えて、その多くは後世の付加によると解すべきであろう。いずれにしても、この書は漢代、少なくともその初期の醫學思想を代表する重要な書であって、馬王堆三號墓のなかに『易經』や『老子』などとともに收納されていたのも、單なる偶然や死者が生前使用していた必需品的なものという意味ではなく、これらと同じ扱いを受けた書であったことを示している。したがって、この書の研究は漢代初期の醫學思想の解明に重要な意義を持つものである。この貴重書が完本でなかったことについては二つの可能性が考えられる。醫書は秦の始皇の焚書を免れたとは傳えられてはいるが、全く害に遇わなかったという保證はなく、それを含めて、その前後の戦亂の時代に完本が失われてしまい、この多少缺陷を持った書だけが残ったというのがその一つで、この戦亂

の時代に、この學派の中心的な人たちが失われてしまい、そのためにそれまで續けられて來たテキストの改訂作業が未完のまま終ってしまい、漢代にはいつて檢討が再開された時には考えかたが變つたために、その方向も變つて『太素』經脈篇のような展開になったというのがもう一つである。後世の書への引用の状態をみると、この灸經より多少はよい書はあったかもしれないが、後者である可能性が強い。

『陰陽灸經』はこのような意味で今後、漢代の醫學の解明のために各方面から研究されるべきであるが、現在までに明らかになった二、三の點を述べておきたい。

經脈は中國醫學の基本をなす概念の一つである。脈は經脈の意味に使われることもあり、脈搏乃至脈管を意味することもある。『脈經』には兩方の考えが混在しているし、王充はもっぱら後者の意味で用いている。⁽⁴⁶⁸⁾『陰陽灸經』で單に脈と稱するものは明らかに經脈に相當する。ただし、その記載は後世ほど整理されていず、經脈說發展の一斷面の姿を示している。この灸經は經脈概念形成過程の研究にとって重要な資料である。

陰陽乃至五行說も中國醫學、特に內經醫學を形成する重要な概念の一つである。この灸經では五行說は導入されていないが、經脈の陰陽による整理命名の試みがなされている。その際に、前述のように、各脈の手足での起點または終點の部位が考慮に入れられたと考えられ、後世の身體各部位の陰陽配當が遅くともこの時期には既に始まっていたことが明らかになった。

骨などの身體部位を示す解剖用語については、古來種々の解釋がなされ、定説のなかったものがある。肝、臍、臍などもそれであるが、前述のように經脈の走行路の追跡から、この灸經での使いかたが明らかになった。この書は當時の最も權威のある醫書と考えられるから、少なくとも秦漢交代期前後のこれらの語の内容は、この書での解釋に従ってよいであろう。

先に引用したように、『太素』經脈篇、足厥陰之脈の所生病の項には狐疝の語があり、これに對して楊上善は「狐夜不得尿。至明始得。人病與狐相似。因曰狐疝。有本作頰疝。謂偏頰病也」という注を與えている。狐疝は『金匱要略』にもあり、⁽⁴⁷⁶⁾そこでは『陰狐疝氣者。偏有小大。時時上下。蜘蛛散主之』となっている。病氣としては偏側の鼠徑ヘルニアによる劇痛で、はっきりしているが、狐の字は難解で、前記の説のほか「病發時腹内部分腸段滑入陰囊。陰囊時大時小。脹痛俱作。如狐之出沒無常。故名」などという⁽⁴⁷⁷⁾解釋も行われている。しかし『陰陽灸經』と比較してみると、これは偏疝に由來するものであることがわかる。したがって、偏疝が狐疝に改められ、それが書き誤られて狐疝になったという可能性も考えてみるべきであろう。『太素』の足少陰之脈には面黑如地色の句がある。この地色も難解であるが、この部分は『陰陽灸經』の甲本では黧色、乙本では地色となっているから、これを誤って地色としたのであろう。『甲乙經』と『脈經』で炭色、『靈樞』で漆柴となっているのは、恐らく地色では説明困難であるため、面黑の意を受けて、このように改めたのであろう。

『陰陽灸經』は短い書であるが、その一通りの検討によっても、このように多くの手懸りを與えてくれる。今後、『足臂灸經』や『五十二病方』などの書を含めて、さらに詳しく研究することによって、漢代の醫學の實態や現存醫學古典の成立の事情がより明らかになり、これらの古典の從來の解釋のなかにも修正を要するところが出て來るであろう。

この研究は人文科學研究所科學史研究室の新發現科學史資料の研究班の研究會の席上で行われた討議の内容をもとにして、さらに検討を加えたものである。研究會の席上では乙本を用いたが、その後、甲本が内容の一部を改めて、單行書『五十二病方』に收められて出版されたため、今回はそれに従うこととし、譯文の内容も研究會の時のものから一部變更した。『五十二病方』中の疑問の文字については北京中醫研究院の馬繼興氏に説明を求め、それに従って訂正した。ここ

に記して感謝の意を表する。

注

- (1) 中醫研究院醫史文獻研究室「馬王堆帛書四種古醫學佚書簡介」、『文物』一九七五年、六期。
- (2) 馬繼興、李學勤「我國現已發現的最古醫方」、『五十二病方』(注(5))一七九頁。
- (3) 中醫研究院醫史文獻研究室「馬王堆三號漢墓帛書導引圖的初步研究」、『文物』一九七五年、六期。
- (4) 馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆漢墓出土醫書釋文(一)」、『文物』一九七五年、六期。
- (5) 馬王堆漢墓帛書整理小組編「馬王堆漢墓帛書、五十二病方」、一九七九年、文物出版社刊。
- (6) 『太素』卷八。この巻は冒頭部分が缺けているために篇名は明らかでないが、假に經脈篇としておく。『太素』は仁和寺本の寫眞に従った。國立中國醫藥研究所影印(一九七一年版)の顧從德本に依る。『素問』には直接相當する部分はない。
- (8) 『靈樞』卷三、經脈第十。比較に用いたのは醫統正脈全書(民國十二年北平中醫學社補刊)本、四部叢刊本、四部備要本、國學基本叢書本、和刻本(寛文三年風月社左衛門刊)である。
- (9) 『甲乙經』卷二、十二經脈絡脈文別第一上。比較に用いたのは醫統正脈全書本、槐廬叢書本と北京人民衛生出版社刊本(醫統正脈本に句讀を加えて影印したものというが、民國版醫統正脈本とは一致しない點もある)である。
- (10) 『脈經』卷六。比較に用いたのは靜嘉堂文庫藏何大任本、萬曆二十九年醫統正脈全書本、光緒十九年楊氏鄰蘇園刊本、四部叢刊本、和刻本(慶安二年村上平樂寺刊)である。

- (11) 傍線で示した部分は『陰陽灸經』と一致する字句である。
- (12) 『病方』によれば34、35の兩行は缺落し、乙本によって補ったが、一行の字數から推算して、それでも不足の部分は『靈樞』によって補足したという。鉅陽脈の部分は乙本にも缺けているが、他の脈の記載からみて、鉅陽脈又は『文物』釋文にある足鉅陽脈の字があったことは間違いないであろう。鉅は巨に通じ、巨陽脈は太陽脈を意味する。『素問』熱論などに用例がある。
- (13) 『文物』釋文にあるように脈と解する。
- (14) 『病方』釋文は踵と解して、接の意に取るが、後出(注(43)参照)と同じく衝と解する。『集韻』「衝。一曰。突也」。『史記』藺相如傳「怒髮上衝冠」。踵は『漢書』武帝紀「踵軍後數十萬人」(注)師古曰。踵。接也。
- (15) 乙本は踝とする。『說文』卷二「踝。足踝也」。『釋名』釋形體第八「踝。確也。居足兩旁。確確然也。亦因其形踝踝然也」。
- (16) 『說文』卷十二「婁。空也。从母。从中女。婁空之意也」(段注)凡中空曰婁。『足臂灸經』は婁とする。
- (17) 『足臂灸經』は卻とする。脚と解する。『說文』卷四「腳。脛也。从肉。卻聲」(段注)東方朔傳曰。結股腳。謂跪坐之狀。股與腳以却爲中。腳之言卻也。卻歩必先脛。
- (18) 『病方』注の「周禮」考工記、臬氏「其臂一寸」(注)故書臂作脛に基づいて脛と解する説に従う。
- (19) 『說文』卷八「厭。窄也。从厂厭聲」。『素問』氣穴論には「兩髀厭分中二穴」(注)謂環跳穴也。在髀樞後。足太陽少陽二脈之會。「寒熱飢。在兩骸厭中。二穴」(注)骸厭謂膝外。俠膝之骨厭中也」の二説があるが、脛を臂と解することにより前者を取る。

- (20) 『病方』釋文に従い、挾と解する。
- (21) 『釋名』釋形體第八「脊。積也。積續骨節終上下也」。
- (22) 『釋名』釋形體第八「頭。獨也。於體高而獨也。『太素』ほかの顛または顛に相當する。『病方』注は頭角をひたいの髪を生えきわで、左右と下方に向かって彎曲している部位を指すと解している。
- (23) 『說文』卷九「顏。眉之間也〔段注〕醫經之所謂闕。道書所謂上丹田。相書所謂中正印堂也。按。庸風。揚且之哲也。子之清揚。揚且之顏也。……毛云。顏角。蓋指全額而言。中謂之顏。旁謂之角。由兩眉間以直上皆得謂之顏。醫經。雜曰顏曰庭。是也」。段注のようにひたいの中央部と解すべきであろう。
- (24) 『太素』卷十三、骨度「缺盆以下至謁髻。長九寸。……謁髻以下至天樞。長八寸」。この謁髻は謁髻は『靈樞』の注に「音曷于。肩骨也」というのは誤りで、『集韻』「謁。謁髻。胸前骨」とあるように胸骨、謁髻は劍狀突起と解すべきである。『陰陽灸經』ではこれと違って顔面にある骨を意味し、『靈樞』卷八、五色「闕者眉間也」の闕と同義に解すべきであろう。『病方』注は謁に通じて顛と同じとし『說文』卷九「頰鼻莖也。从頁安聲」に従う。
- (25) 繫に通じる。乙本も同じ。
- (26) 『論語』陽貨「古之矜也廉〔皇疏〕廉。隅也」。
- (27) 『脈經』は膀胱の二字を脱する。
- (28) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』は顛とする。
- (29) 『甲乙經』と『靈樞』は上を脱する。
- (30) 四部叢刊本『靈樞』は循とする。
- (31) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』は絡とする。
- (32) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』は循とする。
- (33) 『甲乙經』と『靈樞』は挾とする。
- (34) 貫の上に『甲乙經』と『脈經』では會於後陰の四字が『靈樞』では挾脊の二字がある。
- (35) 『甲乙經』と『靈樞』は肘とし、『脈經』は髻とする。ただし和刻本

- (36) の『脈經』は髻の字を脱する。
- (36) 『甲乙經』と『靈樞』は過の上に挾脊内の三字がある。
- (37) 『靈樞』は後の上に從の字がある。
- (38) 『脈經』は下合の二字を過とする。
- (39) 『脈經』は臑内、『甲乙經』と『靈樞』は臑内とする。
- (40) 『太素』その他により補う。
- (41) 『太素』その他により補う。
- (42) 『病方』釋文に従い、動と解する。『素問』刺要論「淺深不得。反爲大賊。內動五藏。後生大病〔注〕動謂動亂」。
- (43) 『病方』釋文は腫と解する。しかし『太素』その他にあるように衝とすべきであろう。『素問』至真要大論〔注〕衝頭痛。謂腦後眉間痛也。腫については『說文』卷四「腫。癰也。从肉。重聲」。『莊子』逍遙遊「吾有大樹。人謂之樗。其大枝擁腫而不中繩墨。其小枝卷曲而不中規矩」。『左傳』定公十一年「公閉門而泣之。目盡腫」。『史記』倉公傳「病見寒氣則遺溺。使人腹腫」。『周禮』天官、瘍醫「掌腫瘍潰瘍〔注〕腫瘍。癰而上生創者。潰瘍。癰而含膿血者」。化膿してはいないはれものをいう。乙本は痛以下脊までの六字を缺く。
- (44) 『病方』釋文と同じく、腰と解する。『釋名』釋形體第八「要。約也。在體之中。約結而小也」。
- (46) 『病方』釋文に従い、似と解する。
- (47) 『病方』釋文に従い、髀と解する。『說文』卷四「髀。股外也。从骨。卑聲〔段注〕股外曰髀。髀上曰髀。肉部曰股髀也」。大腿骨頭部。
- (48) 臑如結の三字は乙本にもない。字數を合わせるために補ったのであろうが、根據不十分。臑は『荀子』富國篇第十「是猶使處女嬰寶珠佩寶玉負戴黃金。而遇中山之盜也。雖爲之逢蒙視。詎要機臑。君慮屋妾。由將不足以免也〔注〕詎與屈同。要讀爲腰。機曲也。臑曲脚中」。『素問』至真要大論「臑如結〔注〕臑謂膝後曲脚之中也」。
- (49) 乙本は臑如裂此爲蹠の六字を缺く。したがって裂此の二字は乙本にもないが、『太素』その他から考えて間違いないであろう。『說文』卷四

- 〔膻。腓腸也。从肉。耑聲〔段注〕膻者脛之一端。舉膻不該脛也。』素問「至真要大論」膻如別〔注〕膻。膻後軟肉處也。』說文「卷四」膻。脛端也。从肉。行聲〔段注〕耑猶頭也。脛近膝者曰膻。』
- (50) 乙本は厥とする。厥と解すべきである。
- (51) 乙本は巨とする。
- (52) 乙本は脈とする。
- (53) 主以下37行目二字目の瘧の上まで乙本により補う。
- (54) 醫統正脈本の『甲乙經』は腫とする。
- (55) 人民衛生版の『甲乙經』は痛の字を脱する。
- (56) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』はいずれも曲とする。
- (57) 『脈經』は景蘇園本と和刻本以外は、いずれも列とする。
- (58) 産は生に通ずる。是動則病に續けて並べられた病氣と其所産病(後世の書では所生病)の下に書かれている病氣がどう違うかということは、是動病と所生病として古來論議の對象となつてゐるが、定説はない。たとえば『難經』二十二難「經言。脈有是動。有所生病。一脈輒變爲二病者。何也。然。經言是動者。氣也。所生病者。血也。邪在氣。氣爲是動。邪在血。血爲所生病」は氣と血と障害を受けるところの違いによるとし、徐大椿『難經經釋』「是動所生病者。見靈樞經脈篇。是動諸病。乃本經之病。所生之病。則以類推。而旁及他經者。經文並無氣血分屬之說」はその經脈の病氣と他の經脈に波及して起る病氣との違いとする。
- (59) 『說文』卷十二「聾、無聞也。从耳。龍聲」とあるが『釋名』釋疾病第二十六「聾。龍也。如在蒙籠之內。聽不察也。』素問「熱論」九日少陽病衰。耳聾微聞」のように高度の聴力障害と解すべきであろう。
- (60) 未詳。『說文』卷七に「瘧。瘧急也」とあることから、かぜひきで鼻づまりのある時やトンネルにはいった時に経験するように、急に耳ががんと鳴って聞えが悪くなる状態かもしれない。
- (61) 『說文』卷七「瘧。寒熱休作病。从疒。虐亦聲。』素問「瘧論その他に説くようにマラリア。乙本は瘧とする。
- (62) 『病方』釋文に従い、背と解する。
- (63) 乙本は痛を脱する。
- (64) 『病方』釋文に従い、痔と解する。
- (65) 乙本は法とする。『說文』卷四「𦵏。亦下也。从肉。去聲。』素問「五藏生成篇」支𦵏𦵏脇〔注〕𦵏。謂脇上也」とあるが、ここでは前後の關係から考へて、『病方』釋文にもあるように、腳の略と解すべきであろう。
- (66) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。ただし乙本も十の字を缺くが、病氣の数から類推して、この缺字が十であることは間違いない。痺も乙本に缺けているが、『太素』その他の小指不用に基づいて補つたのであろう。
- (67) 『甲乙經』と四部叢刊本と和刻本の『靈樞』は頤、醫統正脈本と四部叢要本、國學基本叢書本の『靈樞』は頤『脈經』は腦とする。
- (68) 『脈經』は頤とする。『甲乙經』は頤と痛のあいだに頤間の二字を入れる。
- (69) 『脈經』は爲此諸病以下、以經取之までの三十三字を『甲乙經』は盛則寫之以下、以經取之までの二十九字を脱する。
- (70) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに口の下に也の字がある。
- (71) 乙本は胃頭の二字を缺く。したがつてこの字は兩本に缺けているが、前後の關係から考へて『病方』釋文にあるように、少であることは明らかである。
- (72) 乙本は上を脱する。
- (73) 乙本は魚股之の三字を缺く。魚股は他の脈の走路から考へても、大腿部の一部を指すと推定されるが未詳。『病方』注は大腿前面の大腿四頭筋部で、膝をまげた時に魚のような形になるからであろうとするが、足太陰脈には魚股陰下廉という表現もあり、大腿下部と解しておく方が妥當であろう。
- (74) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (75) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。

- (76) 『脈經』は膽の字を脱する。
 (77) 『靈樞』は銳とする。
 (78) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに角の上に頭の子がある。
 (79) 『脈經』は脈とする。
 (80) 『脈經』は目の字を脱する。
 (81) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに目の字を脱する。
 (82) 『靈樞』は合の下に子(國學基本叢書本は於)の字がある。
 (83) 『甲乙經』、『靈樞』は於の上に抵の字がある。
 (84) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに隔とする。
 (85) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』がともに厭とするように、厭の誤りであろう。
 (86) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに腋とする。
 (87) 『甲乙經』と『脈經』は胸中とする。
 (88) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』はいずれも太の字を脱する。
 (89) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』はともに絶とする。
 (90) 『脈經』は趺とする。
 (91) 『脈經』は出とする。
 (92) 『甲乙經』と『脈經』は端とする。
 (93) 『脈經』は別を脱する。
 (94) 『甲乙經』と『靈樞』は岐の下に骨の字がある。
 (95) 『甲乙經』と『脈經』は貫の下に入の字がある。
 (96) 和刻本の『靈樞』は毛の下に膽足少陽也の五字がある。
 (97) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (98) 乙本は則とする。『病方』釋文に従い、側と解する。
 (99) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (100) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (101) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (102) 『靈樞』は轉とする。
 (103) 面の下に『甲乙經』と『脈經』では微の字が『靈樞』では微有の二字

- がある。
 (104) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに、少陽の二字を『陰陽灸經』と同じ外とする。
 (105) 『難經』四十二難「心。重十二兩。中有七孔三毛。盛清汁三合。主藏神」は明らかに心臓を指しているが、心痛は『太素』卷二十六、厥心痛「心痛。引腰脊欲臥。取足少陰。心痛。腹當當然。大便不利。取足太陰。心痛。引背不得意。刺足少陰。心痛。少腹滿。上下無常處。便澁難。刺足厥陰。心痛。但短氣不足以息。刺手太陰」などとあるように、心臓前面に當る左胸部を中心とした疼痛をいう。
 (106) 乙本は所産病の三字を缺く。
 (107) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (108) 乙本は痛の字を缺く。
 (109) 乙本は虐とする。
 (110) 乙本は痛脾外の三字を缺く。
 (111) 原本は外を脱する。『病方』注に従って補うが、その根據として『靈樞』經脈には脾外の文字はない。
 (112) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (113) 原本はこの二字を脱するが、『病方』注に従い、乙本より補う。
 (114) 乙本は魚の字を脱する。
 (115) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。ただし乙本は膝を鄰とし、廉の字は脱する。
 (116) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (117) 乙本は痺とする。痺を痺と書き、それを誤ったのであろう、との角頤の二字を『甲乙經』は面頤、『靈樞』は痛頤、『脈經』は痛角頤とする。
 (118) 『甲乙經』、『靈樞』、『脈經』ともに腋とする。
 (119) 『甲乙經』、『靈樞』、『脈經』ともに腋とする。
 (120) 『甲乙經』は腫の下に痛がある。
 (121) 俠腰の二字を『甲乙經』と『脈經』は俠腰、『靈樞』は俠腰とする。

- (122) 『甲乙經』と『脈經』は胛とする。
- (123) 『靈樞』は則の字を缺く。
- (124) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (125) 『說文』卷四「𦵏。𦵏也。从骨。干聲。」𦵏。𦵏也。从骨。交聲。『周禮』考工記、輪人「參分其股圍。去一以爲𦵏圍」〔注〕方言股以喻其豐。故言𦵏以喻其細。人脛近足者。細於股。謂之𦵏。羊脛細者。亦謂𦵏。『爾雅』釋訓第三「既微且𦵏。𦵏場爲微。腫足爲𦵏」〔注〕𦵏。脚脛。瘍。創。『淮南子』俶眞訓「雖以天下之大。易𦵏之一毛。無所𦵏於志也」〔注〕𦵏。自膝以下。脛以上也。下脛であることは一致しているものの、その部位については定説がないが、ここでは高誘のいうように脛の上部では説明がつかない。また『陰陽灸經』では𦵏、𦵏の語はあるが、脛はみられない。したがって余雲岫『古代疾病名候疏義』二三頁、一九五三年、人民衛生出版社刊）のいうように脛全體と解するのが妥當である。
- (126) 乙本は𦵏とする。
- (127) 乙本は上の字を缺く。
- (128) 乙本は實とする。『說文』卷四「𦵏。𦵏也。从骨。實聲」〔注〕𦵏。脛頭節也。釋骨云。蓋膝。『文選』卷十、潘岳「筑聲厲而高奮。狙潛鉛以脫𦵏」〔注〕郭璞三蒼解詁曰。𦵏。膝蓋。『荀子』正論「捶管𦵏脚」〔注〕𦵏。膝骨也。脚。古脚字、𦵏脚。謂別其膝骨也。
- (129) 乙本は股を缺く。
- (130) 乙本は穿を缺く。
- (131) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (132) 『病方』注によれば、頰の字はこれに重なった帛にうつった字より補ったという。
- (133) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (134) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。乙本に従えば頰の下に六字分の缺字があり、そのうちの下の三個分には動則をあてて。
- (135) 『脈經』は胃の字を脱する。
- (136) 『靈樞』は鼻の下に之の字がある。
- (137) 中の下に『甲乙經』は傍約太陽之脈、『脈經』は傍約太陽之脈、『靈樞』は傍納太陽之脈の六字がある。
- (138) 『靈樞』は挾とする。
- (139) 醫統本『脈經』は卻とする。
- (140) 『脈經』と『靈樞』は隔とする。
- (141) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』はいずれも臍とする。恐らく齊の略字の誤りであろう。
- (142) 『甲乙經』と『靈樞』は起の下に於『靈樞』の版本には於を于とするものもある。の字がある。
- (143) 『脈經』は口下の二字を下口とする。
- (144) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに髀の下に關の字がある。
- (145) 『甲乙經』と『脈經』は膝入の二字を入膝とする。『靈樞』は入の字を脱する。
- (146) 『靈樞』は脛とする。
- (147) 『靈樞』は廉とする。
- (148) 『靈樞』は以の字を脱する。
- (149) 和刻本『靈樞』は端の下に胃足陽明也の五字がある。
- (150) 乙本は是動則の三字を缺く。
- (151) 乙本は洒洒病の三字を缺く。
- (152) 乙本は善とする。『左傳』襄公二十八年「慶氏之馬善驚」〔疏〕善驚。謂數驚。古人有此語。今人謂數驚。爲好驚。
- (153) 乙本は信とする。『文物』釋文（注4）は伸と解する。『病方』注は馬王堆帛書『老子』乙本が現行本の是謂襲明の四字を是胃曳明として、そこから類推して、もとは喜申とあり、その申の字を誤って曳とし、それにまた龍の字を假借した、と解している。
- (154) 乙本は數とする。
- (155) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、欠と解する。『說文』卷八「欠。張口氣。悟也。象氣。从儿。上出之形」。『儀禮』士相見禮「凡侍坐於君子。

- 君子欠伸。問日之早晏〔注〕志倦則欠。體倦則伸」
 (166) 黑以下、問まで、『病方』釋文に従い、乙本から補う。
 (157) 乙本は亞とするが、『文物』釋文に従い、惡と解する。
 (158) 乙本は易『文物』釋文は惕と解する」とする。
 (159) 乙本ともに釋文では簡體字の惊に置換えられている（馬繼興氏の手紙による）。
 (160) 乙本は心腸の二字を缺く。腸は『病方』釋文に従い、惕と解する。
 (161) 乙本は閉を缺く。
 (162) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (163) 乙本は則欲登高の四字を缺く。
 (164) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。登高の二字は兩方に缺けているが、前後の文から考えて、おそらく登高であろう。
 (165) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (166) 乙本は陽明脈の三字を缺く。
 (167) 『甲乙經』と『脈經』は洒洒を凄凄然とする。
 (168) 『脈經』の醫統本と四部叢刊本は則の字を脱する。
 (169) 『脈經』の何大任本と四部叢刊本は誑とする。
 (170) 『脈經』は欲動を動欲とする。
 (171) 閉戸牖の三字を、『甲乙經』と『靈樞』は閉戸塞牖とする。
 (172) 醫統本の『甲乙經』は奔とする。
 (173) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに響とする。
 (174) 和刻本以外の『靈樞』は謂とする。
 (175) 『甲乙經』は臂、『脈經』と『靈樞』は肘とする。
 (176) 『周禮』大師「皆播之以八音。金石土革絲木匏竹〔注〕木。祝故也。」「太素」卷八、陽明脈解は「陽明之脈病。惡人與火。聞木音則惕然而驚。鐘鼓不爲動。聞木音而驚者。願聞其故」と、鐘鼓の音と對比させている。
 (177) 乙本は甬とする。
 (178) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、軌と解する。『說文』卷四「軌。病

- 寒鼻窒也。」「素問」金匱真言論「春不鼽衄〔注〕軌。謂鼻中出水」。はなつまりとはなみずの違いであり、どちらともとることができるが、ここでは時代の古い『說文』の説をとっておく。
 (179) 乙本は領とする。『病方』釋文に従い、領と解する。『方言』卷十「領。頤。頤也。南楚謂之領」。『素問』刺熱篇「兩頤痛」。
 (180) 乙本により補う。
 (181) 乙本は腫とする。『病方』釋文に従い、腫と解する。『太素』經脈はこれに對し「陽明一游行於腹外。一游行於腹内。腹内水穀行通。故少爲腫。腹外衝氣數壅。故腹外多腫也」の注を與える。
 (182) 乙本は腸とする。『病方』釋文に従い、腸の誤りと解する。
 (183) 乙本は郤とする。
 (184) 『病方』注は『說文』卷二「跳。蹵也。从足。兆聲。」「蹵。僵也。从足。厥聲」を引き、僵直と解する。乙本は膝以下を郤足臂膊とし『文物』釋文はこれを膝足痿痺と解する。
 (185) 『病方』釋文は附と解する。『儀禮』士喪禮「乃屨綦結于附。連約〔注〕附。足上也」。
 (186) 乙本は最後の三字を缺くが、『病方』釋文にあるように、この二個の缺字は爲と病であろう。
 (187) 『甲乙經』は瘕とする。
 (188) 『甲乙經』と『脈經』は緊とする。
 (189) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに大腹水腫とする。
 (190) 『脈經』は腫を脱する。
 (191) 『甲乙經』と『靈樞』は乳氣街とする。
 (192) 『甲乙經』は肘、『脈經』と『靈樞』は肘とする。
 (193) 『甲乙經』と『靈樞』は饑とする。
 (194) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』は黃とする。
 (195) 乙本は起以下、牖までの八字を缺く。
 (196) 『病方』釋文に従い補う。
 (197) 乙本は出以下を出指上廉とし、乘手北は脱する。

- (198) 『脈經』は小腸の二字を脱する。
- (199) 『脈經』は起の下に之の字がある。
- (200) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに腕とする。
- (201) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに下を缺く。
- (202) 『靈樞』は筋とする。
- (203) 『靈樞』は肘とする。
- (204) 盆の下に『甲乙經』では向腋下の三字、『脈經』では向腋の二字がある。
- (205) 『甲乙經』と『靈樞』は銳とする。
- (206) 皆の下に、『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに斜絡於額の四字があり、和刻本の『靈樞』ではその下に更に小腸手太陽也の六字がある。
- (207) 『說文』卷四「臑。臂。羊豕曰臑。从肉。需聲。讀若儒」〔段注〕許書嚴人物之辨。人曰臂。羊豕曰臑。しかし『陰陽灸經』の記載によれば、臑は人の上肢の一部の名稱であり、齒脈の走行からも明らかであろうに、指、手、臂、肘、臑の順になっている。この使いかたは『太素』その他でも同様である。したがってここでは『說文』の説とは異り、『集韻』に「臑。肘骨也」とあるように、上腕乃至上腕骨と解すべきである。
- (208) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。是動則病の四字を乙本は缺くが、これを補うことについては問題はない。次の噤痛の二字は乙本にも缺け、恐らく字數の關係から、『太素』その他に従って補ったのであらう。
- (209) 乙本は腫甬とする。
- (210) 乙本は雇とする。
- (211) 乙本も同じ。『病方』釋文に従って、似と解する。
- (212) 醫統本と槐廬本の『甲乙經』は腋とする。
- (213) 『說文』卷二「噤。咽也。从口。益聲」〔注〕噤者扼也。扼要之處也。咽噤變聲。
- (214) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (215) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。乙本は痛を前出のように、いずれも甬とする。
- (216) 乙本は侯とする。『文物』釋文に従い、喉と解する。『病方』釋文も同じ。
- (217) 乙本は肘と痛のあいだに缺字が一個ある。
- (218) 『脈經』は頰腫頸頤の四字を頰頤腫頸とする。
- (219) 『太素』卷三十、喉痺噤乾「喉痺舌卷」、喉痺不能言。『甲乙經』卷十二、手足陽明少陽脈動發喉痺咽痛第八「喉痺食不下」。諸病源候論卷三十「喉痺者。喉裏腫塞痺痛。水漿不得入也。咽と喉の區別は必ずしも明らかではない。
- (220) 『說文』卷四「臂。手上也」。『太素』卷十三、骨度「肘至腕。長尺二寸半」〔注〕腕者。臂手相接之處。前腕に相當する。
- (221) 『說文』卷四「肘。臂節也」〔段注〕左與臂之節曰肘。股與脛之節曰榑。『太素』卷十三、骨度「肩至肘。長尺七寸」〔注〕從肩端至肘端量也。
- (222) 乙本は于手北出臂外兩骨の八字を缺く。
- (223) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。『太素』卷八、脛脈（手太陽之脈）「直上脛臂下骨下廉」〔注〕臂有二骨。垂手之時。內箱前骨。名爲上骨。外箱後骨。名爲下骨。手太陽脈。行下骨之下將側之際。故曰下廉也。これによると上骨は桡骨、下骨は尺骨をいい、上廉と下廉はそれぞれの骨の母指側と小指側の縁を意味する。
- (224) 乙本は兼とする。
- (225) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (226) 『脈經』は三焦の二字を脱する。
- (227) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに表の下に腕の字がある。
- (228) 『脈經』は交とする。
- (229) 『靈樞』は和刻本のほかは落とする。和刻本『靈樞』と『甲乙經』、『脈經』は絡とする。
- (230) 『甲乙經』は偏、『靈樞』は循とする。

- (231) 『脈經』は腫とする。
- (232) 『甲乙經』と『脈經』は俠、『靈樞』は繫とする。
- (233) 『甲乙經』と『脈經』は頤とする。
- (234) 和刻本の『靈樞』は皆の下に三焦手少陽也の六字がある。
- (235) 乙本は淳淳とする。
- (236) 『脈經』は焯焯とする。
- (237) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに焯焯とする。
- (238) 乙本は讀とする。『病方』釋文に従い、皆と解する。
- (239) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。乙本は用とする。
- (240) 『甲乙經』は痛を脱する。
- (241) 『甲乙經』は不の下に爲の字がある。
- (242) 次指與大指の五字を乙本は□指とする。
- (243) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (244) 『脈經』は大腸の二字を脱する。
- (245) 『甲乙經』と『脈經』は端の下に外側の二字がある。
- (246) 『甲乙經』は骨とする。
- (247) 『甲乙經』は上の下に循の字があり、『脈經』は上を循とする。
- (248) 『甲乙經』は前を脱する。
- (249) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに髀の下に骨之の二字がある。
- (250) 『甲乙經』と『脈經』は於を脱する。
- (251) 『甲乙經』は直上至、『脈經』は直入上とする。
- (252) 『甲乙經』は下入とする。
- (253) 『脈經』は齒の下に縫の字がある。
- (254) 『靈樞』の和刻本は孔の下に大腸手陽明也の六字がある。
- (255) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (256) 乙本も同じ。『廣韻』「跗。跗脛。『廣雅』釋親「跗。曲脚也。『集韻』「跗。靨也。一曰。跗出」などの説があるが、この脈にとりあげられている病氣は身體の上部の疾患だけであり、適當ではない。『太素』などにある頤に通ずると解すべきである。『太素』經脈「頤腫」〔注〕頤。

『陰陽十一脈灸經』の研究

- (257) 『甲乙經』は頤、『靈樞』は頤とする。
- (258) 『甲乙經』と『靈樞』は津の下に液の字がある。
- (259) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (260) 『甲乙經』は痛の下に者がある。
- (261) 『靈樞』は盛の字を脱する。
- (262) 乙本は脈の前の字を缺く。大は『病方』釋文のいうように太の略であろう。
- (263) 乙本は膈とする。
- (264) 乙本は也とする。『病方』釋文に従い、也と解する。
- (265) 乙本は被とする。『病方』釋文に従い、被と解する。
- (266) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (267) 『脈經』は脾を脱する。
- (268) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに核とする。
- (269) 『甲乙經』と『脈經』は肱とする。
- (270) 『靈樞』はこの字を脱する。他の二書は循とする。
- (271) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに腹とする。
- (272) 和刻本の『靈樞』は中の下に脾足太陰也の五字がある。
- (273) 乙本もこの字を缺く。『病方』釋文は當の字を補うが根據不明。『素問』脈解篇「所謂上走心爲噫者。陰盛而上走於陽明。陽明絡屬心。故曰上走心爲噫也」〔注〕按靈樞經說。足陽明流注並無至心者。太陰脈說云。其支別者。復從胃別。上膈。注心中。法應以此絡爲陽明絡也。〔新校正云〕詳王氏以足陽明流注並無至心者。按甲乙經。陽明之脈上通於心。循咽。出於口。宜其經言。陽明絡屬心爲噫。王氏安得謂之無。馬蒔。內經素問註證發微「此言脾經諸證。應時合胃者也。…所謂上走心爲噫者。正以脾脈之支別者。復從胃別。上膈。注心中。故脾氣爲陰。陰氣

盛而上走于陽明。則陽明絡屬心。所以上走心而爲噫也。〔素問〕宣明五氣論曰。心爲噫。又按靈樞口問篇曰。寒氣客于胃。厥逆從下上散。復出于胃。故爲噫。夫素問言心。而靈樞言胃。則此篇兼言。陰氣走于胃。胃走于心。見三經相須而爲噫。はいずれも經脈の關係で説明しようとしているが、この『灸經』では無理であらう。しかし上「走心」の赤字が氣である可能性は考えられる。

(274) 乙本は腹とする。『病方』釋文に従い、腹と解する。

(275) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、腹と解する。

(276) 乙本は意とする。

(277) 乙本は欲の上に則の字がある。

(278) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、嘔と解する。

(279) 乙本は得後の二字を缺く。

(280) 乙本は逢とする。『病方』注は『靈樞』との比較から快の誤りであらうとする。得以下、表までの句については諸家の見解は必ずしも一致していないが、『素問』脈解篇の「所謂得後與氣則快然如衰者。十二月陰氣下衰。而陽氣且出。故曰。得後與氣則快然如衰也」という説に對して、馬蒔『內經素問註證發微』は「後者闕也。氣者肛門失氣也」と解し、また楊上善は『太素』について、得後出餘氣としてあることもあって、「寒氣客胃。厥逆從下上散。散已復上出胃。故爲噫也。穀入胃。已其氣上爲營衛及膈中氣。後有下行與糟粕俱下者。名曰餘氣。餘氣不與糟粕俱下。雍而爲脹。今得之洩之。故快然腹減也」という注を與えている。衰を病狀が衰えると解したのは快然の語を重視したことによると思われるが、『陰陽灸經』では是動則病の項には脈の亂れによる障害だけを並べていて、その恢復について觸れたものはないから、快は快の誤りではなく、衰も病狀が悪化して衰えたと解すべきかもしれない。しかし、この帛書中には注が本文と誤られたのではないかと考えられるような不統一な點もあるから、ここでは馬蒔などの説に従っておく。快は『後漢書』卷五十二、崔寔傳「快不自觀」〔注〕快。忽忘也。後は『太素』卷二十六、經脈厥「三陰俱逆。不得前後。使

人手足寒。三日死」〔注〕逆。即氣之失逆。必大小便不通。手足冷。期至三日死也。卷二十三、量繆刺「人有所墮墜。惡血在內。復中滿脹。不得前後。先飲利藥」〔注〕人有墮傷惡血在腹中。不得大小便者。可飲破血之湯。利而出之」などの解があり、また『史記』卷一〇五、倉公傳「令人不得前後洩。……一飲得前洩。再飲得大洩」にある後洩は明らかに索隱の「前洩謂小便。後洩謂大便也」の説に従うべきである。これらのことから後は『病方』注にもあるように、大便と解すべきであらうし、したがって氣についても馬蒔のようにに解すべきであらう。

(281) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに舌の下に本の字がある。

(282) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに嘔とする。

(283) 『脈經』は管とし、醫統本と槐廬本の『甲乙經』は腕とする。

(284) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』はともに出餘の二字を與とする。

(285) 『甲乙經』と『脈經』は而とする。

(286) 乙本も其所産病と次の二字を缺く。『病方』釋文に従い、補う。

(287) 乙本は能の字を脱する。

(288) 『太素』卷八、經脈「〔注〕將欠下得欠。名曰強欠」

(289) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、溇と解する。『廣雅』釋言「溇。渾也。『說文』卷十一「渾。泥也。从水卓聲。『中國醫學大辭典』三四五八頁「溇泄。泄下稠黏垢穢也」。

(290) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。『太素』その他の各書はいずれも水閉とするため、楊上善が小便不利と解しているように尿閉を意味すると考えられるが、ここでは水と閉は別々の病氣を意味している。

(291) 水病すなわち水腫と閉（おそらくは尿閉）であらう。

(292) 『甲乙經』は痛の字を脱する。

(293) 『甲乙經』と『脈經』は溇の上に寒瘧の二字がある。

(294) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに泄とする。

(295) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに疸とする。

(296) 『甲乙經』は不能食、『脈經』は好卧不能食とする。

(297) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに強の上に腎青の二字がある。

(298) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに強の上に腎青の二字がある。

- (297) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに立とする。
 (298) 醫統本の『甲乙經』は肉とする。
 (299) 『脈經』は痛とし、『甲乙經』は腫の下に痛の字がある。
 (300) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに大の上に足の字がある。
 (301) 『靈樞』は則の字を脱する。
 (302) 『説文』卷九「煩。熱頭痛也。从頁火」、『韓非子』外儲說右上「夫瘞疽之痛也。非刺骨髓。則煩心不可支也。非如是。不能使人以半寸砥石彈之」、『太素』卷三、調陰陽「因於暑。汗煩則喘喝。靜則多言」、卷三十、癰疾「癰疾始生。先不樂。頭重痛。視舉目赤。其作極。已而煩心」、『素問』痺論「心痺者。脈不通。煩則心下鼓。暴上氣而喘。噤乾善噫。厥氣上則恐」。
 (303) 乙本では厥陰脈の項は少陰脈の項の次に配置されている。
 (304) 乙本も同じ。『病方』釋文は叢と解するが、『太素』の聚に通ずるとすべきであろう。
 (305) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (306) 乙本は之の字を脱する。
 (307) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (308) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、踵と解する。
 (309) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (310) 乙本は而出の二字を缺く。
 (312) 『病方』釋文に従い補う。ただし太陰以外の出と之後の三字は乙本にも缺け、『靈樞』等の諸書によって補ったのであろうが、根據不十分。
 (313) 乙本は大の字を缺く。
 (314) 乙本は資とする。『病方』釋文に従い、皆と解する。
 (315) 『脈經』は肝の字を缺く。
 (316) 『脈經』は聚、『甲乙經』と『靈樞』は叢とする。
 (317) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに之の下に際の字がある。
 (318) 『甲乙經』は外とする。

- (319) 陰股の二字を『甲乙經』と『靈樞』は股陰とし、『脈經』は陰を脱する。
 (320) 『靈樞』は過とする。
 (321) 『甲乙經』と『靈樞』は唇とする。
 (322) 四部備要本と國學基本叢書本の『靈樞』は者を脱する。
 (323) 肺の下に『甲乙經』と『脈經』は中の字が、和刻本の『靈樞』は肝足厥陰也の五字がある。
 (324) 『素問』骨空論「眇絡季脇。引少腹而痛脹〔注〕眇。謂俠脊兩傍空軟處也。少腹。齊下也」。
 (325) 『病方』注の内眼角とする説に従う。ただし目内廉との關係は明らかでない。
 (326) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
 (327) 乙本は夫の下に則の字がある。
 (328) 『文物』釋文は瘡、『病方』釋文は癰と解するが、瘡の字も用いられていた。『釋名』病疏「陰腫曰瘡。氣下墮也」。乙本も同じ。鼠徑ヘルニアと考えられる。
 (329) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。山は同釋文に従い、疝と解する。『釋名』病疏「又曰疝。亦言詵也。詵詵引小腹急痛也」。同書には「心痛曰疝。疝。詵也。氣詵詵然。上而痛也」という説もあるが、ここでは前説をとる。『説文』卷七「疝。腹痛也。从疒。山聲」。
 (330) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、仰と解する。
 (331) 『甲乙經』は癰、『脈經』は類、『靈樞』は瘡とする。
 (332) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに腰痛の二字を脱する。
 (333) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに塵の下に脱色の二字がある。
 (334) 少腹腫の内容は不明であるが、ヘルニアの可能性もある。
 (335) 『説文』卷五「疵。病也。从疒。此聲」。『古代疾病名候疏義』一四頁「疵按、廣韻五支。疵。黑病。桂馥說文義證。引王隱晉書。趙孟面有疵黯。又云。賈后眉後有疵。蓋即今之母斑(Nevus)也。其小而隆起者。謂之痣(Leucigo)」。しかしここでは母斑(あるいはその色が濃くなる)と考えるより、しみと考えるべきであろう。楊上善も面塵に

對して「面塵色也」の注を與えている。

(336) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。

(337) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。降は『病方』釋文にいうように、痒すなわち瘙と解する。瘙は尿路疾患。

(338) 『病方』釋文に從い、偏と解する。

(339) 有而心煩の四字を、乙本は「病病有煩心」とする。

(340) 乙本は之の字を脱する。

(341) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。

(342) 浪洩を『甲乙經』と『脈經』は洞泄、『靈樞』は瀉泄とする。

(343) 『甲乙經』は精とする。

(344) 『甲乙經』は瘡閉とする。

(345) 『太素』卷十九、知方地「魚者使人熱中」〔注〕魚性是熱。故食之令人熱中。『素問』異法方宜論「魚者使人熱中」〔注〕魚發瘡則熱中之信」は尋麻疹に相當すると考えられ、また『素問』腹中論「熱中。消中。不可服高粱。芳草。石藥」〔注〕多飲數澁。謂之熱中。多食數澁。謂之消中。」「夫熱中消中者。皆富貴人也」〔注〕此人必數食甘美而多肥也。肥者令人內熱。甘者令人中滿。故其氣上溢。轉爲消渴」は糖尿病に相當する。そのほか『太素』卷二八、諸風數類「風氣與陽入胃。脩脈而上至目眚。其人肥。則風氣不得外洩。則爲熱中而目黃也」〔注〕以下言熱中病也。風氣從皮膚脩足陽明之經。從目內眚入屬於胃。故脩其脈至目內眚。以其人肥腠理密實不開。風氣壅而不得外洩。故內爲熱中。病目黃也」などもあり、種々の病氣にわたっている。

(346) 乙本は脛以下、喝喝如喘までを缺く。したがって、中は前後の關係から考えて、そう推定されるものの、確證はない。

(347) 『脈經』は腎の字を脱する。

(348) 『甲乙經』と『脈經』は斜とする。

(349) 『靈樞』は走とする。

(350) 『甲乙經』と『脈經』は於の字を脱する。

(351) 『甲乙經』と『靈樞』は谷とする。

(352) 『甲乙經』と『脈經』は膈の下に中の字がある。

(353) 和刻本『靈樞』は中の下に腎足少陰也の五字がある。

(354) 内踝の外廉は考えにくい。『足臂灸經』が内踝囊中とし、『太素』などが内踝の後としてることから考えても、この記載には誤りのある可能性がある。

(355) 乙本は是動則病拘拘如喘の八字を缺く。『病方』釋文に從い。是動則病の四字を他の項との比較によって補う。

(356) 拘拘は不明であるが、『病方』釋文に從って喝喝と解する。『說文』卷二「喝。漱也。从口。曷聲」〔段注〕莊子庚桑楚。終日嗥而嗑不暇。崔譔本作不喝。云啞也。子虛賦。榜人歌。聲流喝。郭璞曰。言悲嘶也。『論衡』氣壽「兒生號啼之聲。鴻朗高暢者壽。嘶喝濕下者夭」。『後漢書』卷四十五、張酺傳「〔王〕青亦被矢貫咽。音聲流喝」。

(357) 瞋如母見の四字を乙本は茫然無見とする。

(358) 乙本は絶とする。『病方』釋文に從い、懸と解する。『素問』通評虛實論「脈懸小者何如」〔注〕懸。謂如懸物之動也」。

(359) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。

(360) 乙本は易とする。『病方』釋文に從い、惕と解する。『易』乾「夕惕若」。『左傳』襄公二十二年「無日不惕」〔注〕惕。懼。『國語』楚語上「豈不使諸侯心惕傷焉」〔注〕惕傷。懼也」。

(361) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。

(362) 乙本は地とする。『說文』卷十「地。燭夷也。从火。也聲。」「病方」釋文は地と解するが、字形から考えて同様の意であろう。

(363) 乙本は則の字を缺く。

(364) 乙本は骨蹠是の三字を缺く。蹠は注(㉔)のように蹠と解する。

(365) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。乙本は陰の下に之の字がある。

(366) 『病方』釋文に從い、乙本より補う。甲本はこの字を脱する。

(367) 『甲乙經』と『靈樞』は饑とする。『脈經』は饑の下に而の字がある。

(368) 『靈樞』は黒の字を脱する。

(369) 『甲乙經』、『脈經』は炭色、『靈樞』は漆柴とする。

(370) 『脈經』は喝喝を喉鳴とする。

(371) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに而とする。

(372) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに起の字を脱する。衍字であろう。

(373) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに眩暈とする。ただし四部叢刊本は『脈經』、『靈樞』とともに眩暈とする。

(374) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに若とする。『甲乙經』と『靈樞』は飢を饑とする。

(375) 『甲乙經』は氣以下、之までの十四字を脱する。

(376) 『脈經』は若とする。

(377) 『説文』卷二「喘。疾息也。从口。尚聲。」「釋名」卷八、釋疾病「喘。喘也。喘。疾也。氣出入喘疾也。」「古代疾病名候疏義」四六頁「出氣入氣皆急速。然後可謂爲喘。乃今之呼吸短促 (Kurzingkeit) 非哮喘 (Asthma) 也」。

(378) 乙本は産以下、氣までを缺く。『病方』釋文に従い、補う。

(379) 乙本は意とする。『病方』釋文に従い、噎と解する。『説文』卷二「噎。飯窒也。从口。壹聲」。

(380) 乙本は單とする。『説文』卷七「瘰。勞病也。从疒。單聲。」「ただし段注に「瘰與疸。音同而義別。如郭注山海經。師古注漢書皆云。瘰。黃病。王冰注素問黃疸云。疸。勞也。則二字互相假而淆惑矣。瘰或假瘰。或作瘰」とあるように疸と混同された。段注に引くものは『山海經』西山經「翼望之山。有獸。服之已瘰」黃瘰病也。音旦、

『漢書』卷六四、嚴助傳「南方暑濕。近夏瘰熱」〔注〕師古曰。瘰。黃病。王念孫曰。訓瘰爲黃病。則瘰熱二字義相屬。顏說非也。今案瘰者盛也。瘰熱即盛熱。言南方暑濕之地。近夏則盛熱也〕であるが、王念孫の説の是非は別として、必ずしも黃疸と解する必要はない。その他『史記』卷一〇五、倉公傳「齊章武里曹山跗病。臣意診其脈曰。肺消瘰也。加以寒熱。齊王太后病。召臣意。入診脈曰。風瘰客脾。難於大小溲。溺赤。臣意加以火齊湯。疸は『説文』では「疸。黃病也。

从疒。旦聲」と瘰と區別する。『古代疾病名候疏義』一四四頁「瘰。今之神經衰弱性反應也。」「甲乙經」その他の黃疸は『太素』にある黃瘰に由來するものであろう。

(381) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、瘡と解する。

(382) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、瘡と解する。『説文』卷七「瘡。不能言也。从疒。音聲。」「釋名」病疏「瘡。庵然無聲也」。一般にはおしとするが、一時的な發聲不能と解すべきであろう。

(383) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。

(384) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。

(385) 『病方』注に従い、生と解する。

(386) 緩帶の二字は乙本も缺く。したがってこの二字を補った根拠は明らかでないが、恐らく『靈樞』との比較によるものであろう。

(387) 乙本は被とする。『病方』釋文に従い、披と解する。乙本ではこの二字は大杖の下にある。

(388) 『病方』釋文に従い、乙本の杖の略と解する。

(389) 乙本も同じ。『病方』釋文に従い、灸と解する。

(390) 乙本は希とする。『病方』注は「易」歸妹六五の釋文を引き、既と解する。

(391) 北京本の『甲乙經』は生を脱する。

(392) 醫統本の『甲乙經』は喉とする。

(393) 『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに疸とする。ただし和刻本の『靈樞』のみは疸とする。

(394) 醫統本と槐廬本の『甲乙經』は辟とする。

(395) 『甲乙經』と『脈經』は爲以下、取之までの三十三字を脱する。

(396) 『脈經』は食の下に而の字がある。

(397) 『脈經』は害とする。

(398) 四部叢刊本と和刻本の『靈樞』は披とする。

(399) 『甲乙經』は盛の上に爲此諸病の四字がある。

(400) 『靈樞』は則の字を脱する。

- (402) 『説文』卷二「噎。咽也。从口。益聲。」「太素」卷三十、喉痺噎乾「噎乾。口中熱如膠」。
- (403) 乙本は常とする。
- (404) 乙本は之間上骨の四字を脱する。
- (405) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (406) 『太素』は所生病者の項の盛有までを缺く。
- (407) 『脈經』は中の下に後の字がある。
- (408) 『脈經』は出を脱する。
- (409) 和刻本の『靈樞』は端の下に黃帝曰肺手太陰也の八字がある。
- (410) 甲乙兩本とも臂とするが、肘か臍の誤りであろう。
- (411) 乙本は如の字を缺く。
- (412) 乙本は汾とする。『太素』卷十三、骨度「結喉以下至缺盆中。長四寸。缺盆以下至臑腋。長九寸。」「素問」水熱穴論「大杼。膺俞。缺盆。背俞。此八者。以寫腰中之熱也(注) 缺盆。在肩鎖骨陷者中。」「素問」の缺盆は俞穴名であるが、ここでは缺盆穴のある大鎖骨上窩を指すと考えられる。
- (413) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (414) 乙本は單とする。『集韻』「戰。一曰懼慄也」。
- (415) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (416) 醫統本の『脈經』は脈とする。
- (417) 『脈經』と『靈樞』は然を脱する。
- (418) 『靈樞』は效とする。
- (419) 『脈經』と『靈樞』は爲とする。
- (420) 乙本は胸とする。
- (421) 乙本も同じ。『病方』釋文は腕と解するが、根據不明。腕は胃腕すなわち胃袋。
- (422) 原本はこの二字を脱するが、『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (423) 乙本は殆とする。『病方』釋文に従い、肢と解する。
- (424) 乙本は假とする。『病方』釋文に従い、瘕と解する。『説文』卷七「瘕。女病也。从疒。段聲。」「太素」卷二十九、脈論「石瘕生於胞中。寒氣客於子門。子門閉塞。氣不通。惡血當寫不寫。衃以留止。日以益大。狀如懷子。月事不以時下。」「素問」大奇論「三陽急。爲瘕(注) 太陽受寒。血凝爲瘕。」「平人氣象論」寸口脈沈而弱。曰疝瘕少腹痛。骨空論「任脈爲病。男子內結七疝。女子帶下瘕聚」。子宮筋腫または癌のようなものと考えられる。
- (425) 『脈經』は厥を脱する。
- (426) 『脈經』は寒を脱する。
- (427) 不洩數欠の四字を『甲乙經』、『脈經』、『靈樞』ともに小便數而欠とする。
- (428) 『脈經』は變の下に卒遺失無度の五字がある。
- (429) 『甲乙經』は爲此諸病の下に凡十二經之病の六字があり、『脈經』は爲以下、取之までの三十三字を脱する。
- (430) 乙本は上とする。二番目の之間は衍字であろう。乙本にはない。
- (431) 乙本は之を脱する。
- (432) 乙本は痛とする。
- (433) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (434) 乙本は陰の下に入心中の三字がある。
- (435) 『脈經』卷六、心手少陰經病證第三は手少陰之脈のかわりに手心主之脈を入れる。また『甲乙經』は手の字を脱する。
- (436) 『靈樞』は下とする。
- (437) 『甲乙經』と『靈樞』は腋とする。
- (438) 四部備要本と國學基本叢書本の『靈樞』は下を脱する。
- (439) 四部備要本と國學基本叢書本、和刻本の『靈樞』は太の上に手の字がある。
- (440) 『甲乙經』は内の下に廉の字がある。
- (441) 『甲乙經』と『靈樞』は内の下に後の字がある。
- (442) 『甲乙經』は之の字を脱する。
- (443) 和刻本の『靈樞』は端の下に心手少陰也の五字がある。

- (444) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (445) 乙本は噓とする。『病方』釋文に従い、噓と解する。
- (446) 乙本は渴欲飲の三字を缺く。
- (447) 『甲乙經』、『靈樞』ともに爲の上に是の字がある。
- (448) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (449) 『病方』釋文に従い、乙本より補う。
- (450) 『甲乙經』は胸滿痛とする。
- (451) 『甲乙經』と『靈樞』は也の字を脱する。
- (452) 『甲乙經』は盛以下、取之までの二十九字を脱する。
- (453) 山田慶兒「古代中國における醫學の傳授について」、『漢方研究』一九七九年一〇、一一號。
- (454) 中醫研究院醫史文獻研究室「從三種古經脈文獻看經絡學說的形成和發展」、『五十二病方』一四一頁。
- (455) 赤堀昭「新出土資料による中國醫藥古典の見直し」、『漢方の臨牀』二五卷、一一・一二合併號（一九七八）。
- (456) 赤堀昭「陰陽十一脈灸經」と『素問』、『日本醫史學雜誌』二五卷、三號（一九七九）。
- (457) 『脈經』卷六だけは十一である。ただし、その心手少陰經病證第三には『太素』經脈篇にある手少陰之脈の記述はなく、手心主之脈として手厥陰之脈が入れられている。
- (458) 島田隆司「黃帝內經の成立をめぐる」、『東洋醫學』昭和五五年四月號。
- (459) 『甲乙經』卷六、五味所宜五藏生病大論第九、『脈經』卷六にも出る。
- (460) 『太素』卷八、陽明脈解、『甲乙經』卷七、足陽明脈病發熱狂走第二

- にも出る。
- (461) 『太素』卷二六、經脈厥、『甲乙經』卷七、陰衰發熱厥陽衰發寒厥第三にも出る。
- (462) 『太素』卷八、經脈病解にも出る。
- (463) 『素問』厥論篇「〔注〕厥謂氣逆上也。世謬傳爲脚氣。黃師方論焉」
- (464) 張介賓「類經」卷十五「厥者。逆也。氣逆則亂。故忽爲眩仆脫絕。是名爲厥。厥證之起於足者。厥發之始也。甚至猝倒暴厥。忽不知人。輕則漸甦。重則即死。最爲急候。後世不能詳察。但以手足寒熱爲厥。又有以脚氣爲厥者。謬之甚也」。
- (465) 『太素』は踵とする。
- (466) 李鼎「素問脈解篇新證」、『上海中醫藥雜誌』一九七九年一期。
- (467) 『素問』王冰序「〔新校正注〕冰自爲得舊藏之卷。今竊疑之。仍觀天元紀大論。五運行論。六微旨論。氣交變論。五常政論。六元正紀論。至真要論七篇。居今素問四卷。篇卷浩大。不與素問前後篇卷等。又且所載之事。與素問餘篇略不相通。竊疑此七篇乃陰陽大論之文。王氏取以補所亡之卷。猶周官亡冬官。以考功記補之之類也」
- (468) 『論衡』書虛篇「夫地之有百川也。猶人之有血脈也。血脈流行。汎揚動靜。自有節度。百川亦然。其朝夕往來。猶人之呼吸氣出入也」
- (469) 『太素』卷六、五藏命分にも「腎下則腰尻痛。不可以俛仰。爲狐疝」とあり、これに對しては「此爲狐疝。謂狐夜時不得小便。少腹處痛。日出方得。人亦如此。因名狐疝也」という注が與えられている。
- (470) 『金匱要略』卷中、跌蹙手指臂腫轉筋陰狐疝虺蟲病脈證治第十九。
- (471) 『中醫辭典』編輯委員會編『簡明中醫辭典』五四七頁、一九七九年、人民衛生出版社刊。